

実践的コミュニケーション能力の基礎を養う 小中一貫した英語教育の在り方を求めてⅡ

一 「自己表現活動」を生かした中学校第2学年

英語科の実践と指導計画の検討を通して 一

昨年度の研究では、小学校英語活動の成果を踏まえ、中学校英語科の目標である実践的コミュニケーション能力の基礎の育成を目指すため、小学校と接続する中学校第1学年の指導計画に着目した。そして、現行の指導計画に3つの視点（視点①「小学校英語活動で身についたことを生かす」視点②「つまづきに対する支援を事前に準備する」視点③「自己表現活動を大切にする」）を取り入れた指導計画を作成し、実践授業を通して検討した。

本研究では、昨年度の研究を生かして、とりわけ視点③に焦点をあてる。生徒が今の自分を表現でき、自分の伝えたいことが表現できるような第2学年の指導計画を作成し、実践を通して検討する。実践的コミュニケーション能力のあるべき姿をめざし、生徒同士が英語を用いて「心と心とをつなぐ」ことができる、第2学年の自己表現活動の指導事例を提示する。

目 次

はじめに	1	第3章 心と心とをつなぐ自己表現活動の 実践事例	
第1章 本市の小学校英語活動と 中学校英語学習		第1節 スピーチにおける指導	
第1節 本市の小学校英語活動		(1) 第1回スピーチ「自己紹介」	17
(1) 小学校英語活動をめぐって	1	(2) 第2回スピーチ 「夏休みにがんばりたいこと」	19
(2) 小学校英語活動を経験してきた生徒たち の特徴	2	(3) 第3回スピーチ 「私の夏休みと私の夢」	21
第2節 本市の中学校英語学習		第2節 自己表現活動における生徒の姿	
(1) 昨年度の研究の課題	5	(1) 第1回スピーチ～第3回スピーチ を終えて	22
(2) 英語での自己表現力の指導上の課題	5	(2) 成果と課題	26
第2章 自己表現活動を生かした 第2学年の指導計画の検討		第4章 小中一貫した英語教育をめざして	
第1節 指導計画の検討		第1節 小学校英語活動と中学校英語学習を つなぐもの	
(1) 第1学年の指導計画の3つの視点	8	(1) 読むことや書くことでの 「つまずき」に対する支援を工夫する	30
(2) 第2学年の指導計画の視点	8	(2) 自己表現活動を積極的に取り入れる	32
第2節 自己表現活動でめざすもの		第2節 中学校英語教育で大切にしたいこと	
(1) 自己表現活動とは	9	(1) 人と人が英語を通してつながること	33
(2) 自己表現活動を支えるもの	10	(2) 人と人が出会えるコミュニケーション	33
(3) スピーチを通してめざすもの	11	(3) 言語能力を高めること	33
(4) ビンゴカードの教材でめざすもの	15	おわりに	34

<研究担当> 村山 紀子 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究協力校> 京都市立嵯峨中学校

<研究協力員> 見原 潔 (京都市立嵯峨中学校教諭)

はじめに

平成17年度より、京都市のすべての小学校で、総合的な学習の時間を使い、英語活動が取り組まれている。中学校では、小学校英語活動を通して生徒たちが身につけてきたことを生かし、それをさらに伸ばしていく指導が求められている。

昨年度は、小学校英語活動から接続する第1学年の指導計画を検討し、研究協力校において実践授業を行った。生徒の「英語で話したい」「英語で書きたい」という願いに応えることができ、また、小学校英語活動で身につけたことが生かせる活動である自己表現活動を積極的に取り入れた。その中のスピーチの活動で、生徒は自分の思いや自分の伝えたいことを、少しずつではあるが、英語で構造的に書き表し、また、それをスピーチとして伝える姿が見られた。英語を書く活動も入れたため、それぞれの生徒のつまずきに対して、個別に支援をすることもできた。そして、それらのことは生徒の学習意欲を高めることにもつながった。

今年度は中学校第2学年の指導計画を作成し、研究協力校での実践授業を通して検討を行う。生徒が、英語で自分の言いたいことや、伝えたいことをさらに構造的に表現できるように願っている。また、英語での自己表現活動を通してクラスの友達とつながること、すなわち、自分のことを知ってもらおうと同時に、相手のことを受け入れ、よりよい人間関係を結ぶことができると願っている。このような心と心をつなぐ自己表現活動の指導事例を、実践授業を通して提示する。

第1章では、小学校英語活動を経験してきた生徒の特徴について述べ、英語での自己表現力の指導上の課題を諸調査から考察する。

第2章では、指導計画を検討する際の視点と自己表現活動のスピーチを通して育てたい生徒の姿を述べる。

第3章では、研究協力校での第2学年の自己表現活動の実践事例を報告する。

第4章では、小中が一貫した英語教育を行う上で大切にしたいこと、指導上留意すべき点を述べるとともに、中学校英語教育で大切にしたいことを述べ、まとめとする。

本研究を通して、小学校英語活動で身につけた、人と言葉でつながる喜びや、コミュニケーションに対する意欲を中学校での英語学習につなげ、実践的コミュニケーション能力の基礎の育成を培っていくことができると願っている。

第1章 本市の小学校英語活動と 中学校英語学習

第1節 本市の小学校英語活動

(1) 小学校英語活動をめぐって

はじめに、小学校英語活動の目標について考える。

平成18年3月27日の中央教育審議会の外国語専門部会において、小学校段階の英語教育の目標(1)については、2つの考え方をあげている。下はそれらを簡単にまとめたものである。

- | |
|-------------------------|
| ① 英語のスキルをより重視する考え方 |
| ② 国際コミュニケーションをより重視する考え方 |

これら2つの考え方を外国語専門部会では、「中学校での英語教育を見通して、何のために英語を学ぶのかという動機付けを重視する、言語やコミュニケーションに対する理解を深めることで、国語力の育成にも寄与するとの観点から、②の考え方を基本とすることが適当である」(2)としている。

また、平成19年11月7日に出された、「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」でも、小学校段階における外国語活動(仮称)では、「小学校段階では、小学生のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、中学校段階の文法等の英語教育を前倒しするのではなく、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目標として、外国語活動(仮称)を行うことが適当と考えられる」(3)としている。

これらのことから、小学校英語活動では、特にコミュニケーションに対する態度の育成を重視しているということがわかる。

次に、小学校英語活動ではどのような内容を扱うのか、その内容についてみることにする。

平成13年度に、文部科学省から出された「小学校英語活動実践の手引」には、活動内容を決める際のポイントとして次の7点を挙げている。(4)

- | |
|----------------------------------|
| (1) 音声を中心とする。 |
| (2) 子どもの「言いたいこと」「したいこと」を扱う。 |
| (3) 子どもの日常生活に身近なことがらを扱う。 |
| (4) 基本的で、応用のきく表現を選ぶ。 |
| (5) 既知のものでも新たな発見をもたらす話題等を扱う。 |
| (6) 外国人の表現や身振りのなかから、文化の違いに気付かせる。 |
| (7) 子どもの発達段階を踏まえた話題・素材・題材を扱う。 |

これらのことを受けて、京都市の小学校英語活動はどのように行われているのか、その取組の概要を述べる。

本研究課では、平成6年度より小学校英語に関する研究を行ってきた。一方、平成9年度から「きょうと英語フロンティアキッズ事業」が開始され、平成11年度からは、全小学校で英語活動に取り組んでいる。その中で、平成14年には、研究成果を生かし「小学校英語活動指導計画と活動事例集(試案)」(5)が発行された。これは、子どもたちに英語によるコミュニケーションを体験させ、英語に慣れ親しむ活動を通して、コミュニケーションを積極的に行う態度の育成をめざして作られたものである。現在はこの試案をもとに、各校の実態に合わせてカリキュラムが生まれ、英語活動に取り組んでいる学校が多い。試案ではタスクを中心とした活動で、子どもたちが伝えたいという気持ちを持って英語を使うような内容となっている。このタスク(6)とは、一般的に「作業」とか「課題」と訳されている。小学校英語活動では、児童はこのような活動を通して、たくさんの英単語を使い、英語であいさつができたり、自己紹介が出来たり、先生の話す英語を理解しようとする態度を身につけたりしながら、「人と言葉でつながる喜び」を感じているのである。

さらに、本研究課では、平成15、16年度に、多田が小中連携を意識して、タスクを中心とした中学校での学習プログラムの開発を行った。授業の中で実際のコミュニケーションを体験させるために、文法を中心としたシラバスに、言語機能、話題、使用場面の要素を加えたいくつかのタスクを指導過程に取り入れ、それらの有効性を明らかにしている。(7)

平成17年度からは、小中の接続を滑らかなものとするため、おおむね2中学校区毎に1名の外国人指導助手(ALT)が配置され、校区内の小学校への英語活動の巡回指導を行っている。そして、市内すべての小学校で、総合的な学習の時間を使い、英語活動が取り組まれている。

このように、英語活動を経験して身につけたコミュニケーションに対する意欲や態度を、中学校での英語学習への意欲につなげるための指導について本格的に考えていく時期が来ているといえる。中学校では小学校英語活動の取組を生かし、生徒が身につけてきたことをさらに伸ばすような、小中一貫を見据えた指導が必要であると考えられる。

(2) 小学校英語活動を経験してきた生徒たちの特徴

平成18年度より、総合的な学習の時間に、小学校英語活動を経験してきた生徒たちが中学校に入学してきた。研究協力校での平成18年度の1年生の様子は、今まで、筆者が担当してきた1年生と比べて、以下のような特徴がみられた。(8)

- ① 英語で発音をしたり、英語を口に出したりすることに抵抗がない。
- ② 音声によるインプットに柔軟に対応できる。
- ③ 発表をすることに躊躇しない。
- ④ 英語を使ったゲームに積極的に取り組む。

この平成18年度の1年生は、全員が小学校のときに、総合的な学習の時間に英語活動を少なくとも1年間経験してきている。研究協力校での参観を通して感じたことは、英語を口にするのことに對して、「照れくさい」という表情があまり見られず、英語を聞こえた通りに発音しようとしている姿である。聞いた英語を、それが長い英文であっても、リズムとイントネーションでとらえて繰り返していた。また、英語を使つての発表には、それが特別なことではなく、自然なこととしてとらえている姿があった。さらに、ゲームの要素を取り入れた活動では、ペアでもグループでも英語を使つて積極的に取り組む姿がみられた。

次に、研究協力校だけではなく、範囲を広げて、本市の平成19年度4月に入学してきた生徒たちには、どのような傾向があるのかを調べてみた。本年度の1年生は、小学校の総合的な学習の時間を使い、少なくとも2年間英語活動を経験してきている。

平成19年度に1年生を担当している本市英語科教員に、アンケートを通して、授業での生徒の様子を聞いた。アンケートは、6月から11月に行われた英語科の支部研修会に筆者が参加し、協力を依頼し、計90件の回答を得た。以下はアンケートの概要及び質問と選択肢である。

〈アンケートの概要〉

「平成19年度1年生の英語の授業での様子」

対象：1年生を担当する英語科教員 90人

時期：平成19年 6月から11月 複数回答可

〈質問〉

英語の授業での、今年度の1年生について、お伺いします。

今年度の1年生は、過去に担当された1年生と比べて、どのような傾向があると思われますか。

(選択肢)

- ・ 英語の挨拶がスムーズにできる。
- ・ 話される英語を理解しようとしている。
- ・ 英語を口に出すことに抵抗がない。
- ・ 発表をすることに躊躇しない。
- ・ ゲームに積極的に参加する。
- ・ アイコンタクトで話すことができる。
- ・ 英単語を知っている。
- ・ 英語のフレーズや文を知っている。
- ・ ペアワークがスムーズにできる。
- ・ 英語の歌を知っている。
- ・ 元気に英語を発音できる。
- ・ 文字を読むことへの抵抗が大きい。
- ・ 文字を書いたり覚えたりすることへの抵抗が大きい。
- ・ すでに、英語学習に対してマイナスのイメージを持っている。
- ・ その他
- ・ 特に変化は感じられない。

図1-1は、平成19年度1年生の授業での様子について、アンケートの結果を集約したものである。なお、過去の1年生と比較しているため、今年初めて1年生を担当した教員のアンケートの回答は含んでいない。

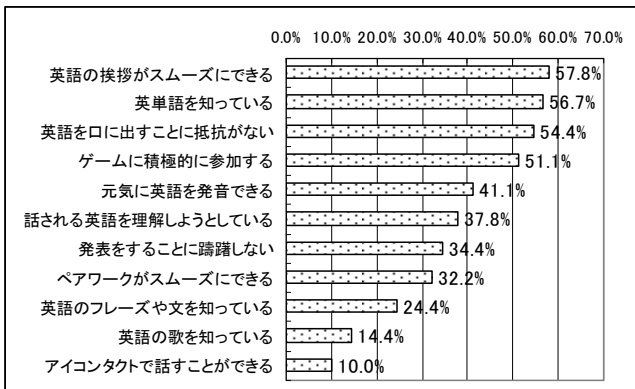


図1-1 「優れていると思われる点」

これを見ると、今年度の1年生を見て、「英語の挨拶がスムーズにできる」「英単語を知っている」という回答が多く、それに続き、全体の54.4%の教員が、「英語を口に出すことに抵抗がない」と回答していることがわかる。

中学時代は、他人からどう思われているのかを気にしてしまう時期だといわれている。しかし、児童期に英語に慣れ親しんでおくことで、日常使う日本語以外の言語を発音することへの抵抗感を少なくしているのではないかと考えることもできる。小学校で、総合的な学習の時間という、学級ごと、または学年ごとでの安心した雰囲気の中で、学級担任やALTが話す英語を聞き、それらを繰り返し発音してきた。自分の英語を聞いてもらっ

たり、友達の話す英語を聞いたりするなかで、英語を発音することに対し、違和感を持つことなく口にすることができたのではないだろうか。

また、コミュニケーションに対する態度に着目すると、全体の37.8%の教員が「話される英語を理解しようとしている」と選択している。小学校では、ALTが指導する時間は、指導の多くを英語で行っている。そのため、ALTが話す英語を聞くときに、表情や動作をじっと見つめて、何を話しているのか、次は何をするのかを、理解しようとする態度が育まれてきたことがうかがえる。

続いて、図1-2は、指導上留意すべき点について、先ほどのアンケートの結果を集約したものである。

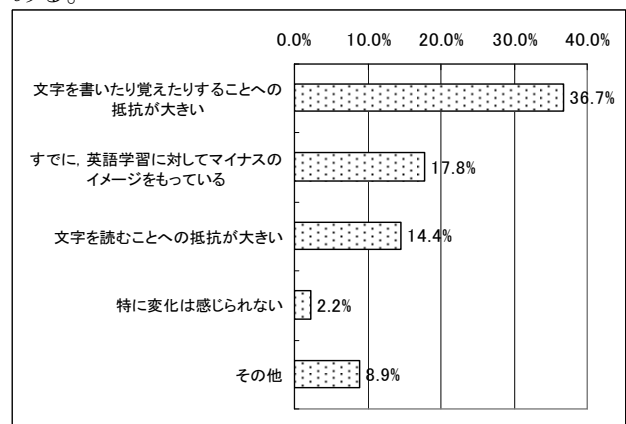


図1-2 「指導上留意すべき点」

文字について着目すると、全体の36.7%の教員が「文字を書いたり、覚えたりすることへの抵抗が大きい」と回答しており、全体の14.4%の教員が「文字を読むことへの抵抗が大きい」と回答している。

小学校では、「聞く」「話す」を中心に英語に親しみ、英語で人とかかわる体験を中心とした活動であり、コミュニケーションに対する態度の育成が重視されていた。

一方、中学校では知識の定着が生徒に求められる。その違いに戸惑っている姿がみえてくる。文字の導入時には、「読む」「書く」「覚える」という活動に、音声指導を先行させながらも、指導の工夫が求められているといえる。

また、「すでに英語学習に対してマイナスのイメージを持っている」とした回答が17.8%あった。英語の学習をすでに難しいと感じてしまっている生徒がいることは、留意しておきたい点である。

次に、「生徒が小学校英語活動を経験してきたことが、特にプラスと感じておられることはどんなことですか」(記述式)という質問に対する回答結

果の一部を紹介する。

「小学校英語活動が特にプラスと感ずること」

英単語を知っている

- ・ 挨拶や身の回りの単語をよく知っている。
- ・ 聞いたことのある単語が以前の1年生よりも多く感じられ、「あつ知ってる。」や「聞いたことがある。」といった意見が多く、授業のテンポアップにつながる。
- ・ すでに多くの単語を知っているので、自己表現の際、いろいろな単語を使おうとすること。

英語を口に出すことに抵抗がない

- ・ 英語を話すことへの抵抗感がない。
- ・ 英語を口に出すことへの抵抗感が少ないと思う。
- ・ 英語を使おうという意欲を感じる。
- ・ 英語は楽しい学習だと感じている子が多い。

ゲームに積極的に参加する

- ・ ゲームに積極的に参加できるのでとてもやりやすい。

話される英語を理解しようとしている

- ・ 単語のレベルでは、たくさんの英語を知っているため、リスニング力はとてもあると思う。
- ・ 英語の音声に慣れており、英語を聞いて何とか推測しようとする。

発表をすることに躊躇しない

- ・ 間違いを恐れなくて積極的に発表できる。

コミュニケーションに意欲的に取り組む

- ・ 躊躇せず誰とでもコミュニケーションができる。
- ・ コミュニケーション活動にとっても意欲的に取り組める。
- ・ 英語を通して自己表現をしたいという思いがある。(話す、書くともに)

ALTと積極的にコミュニケーションを楽しむ

- ・ ALTと積極的に接することができる。
- ・ ALTの話す内容が、よく理解できる。英語を聞くことには慣れている。
- ・ ALTに積極的に話すなど、語彙が少なくても何とか伝えようとする姿勢が見られる。

これらの生徒の姿は、「コミュニケーションを積極的に行おうとする態度」であり、コミュニケーションへの意欲や積極的な態度が、生徒が小学校英語活動を経験してきた中で、ある程度育っている様子が見られる。

次に、このような生徒の小学校での英語活動の経験を踏まえて、英語科教員は授業の中で、どのように指導の工夫をしているであろうか。それに

ついでに回答結果の一部を紹介する。

「小学校英語活動を意識して、英語の授業で取り組まれていることがあれば教えてください。」

まとまった英文を聞き取る力を伸ばす

- ・ 毎時間の初めには、教師のミニトークを行っている。

英語学習への意欲を高める

- ・ できるだけ楽しい絵教材を使っている。
- ・ 小学校で学習した単語を使って導入し、できるだけたくさんの基本文を聞かせ、発音させる。
- ・ 単語を教えるとき、外来語や聞いたことのあることばと結びつけて説明をする。

動作のある活動を取り入れる

- ・ できるだけ、多くの活動(ペアワーク等)を行い、興味をもたせ、指導している。じゃんけんを必ず取り入れる。勝ち負けがある活動など。
- ・ 毎時間、会話やゲームを取り入れている。

文字と音を結びつける

- ・ 音を文字に変換できるように、しかもそのときに、嫌にならないように配慮する。

生徒の興味を持続させるため、生徒の既知っている単語と新出語を結びつけたり、聞く力や推測する力を伸ばしたり、動作を伴った活動を取り入れたりと、学習展開を工夫している姿が見られる。また、留意すべき点でもあったように、文字と音を結びつけて、英語を読むことの指導を工夫する姿が見られる。

生徒は、小学校英語活動を経験することにより、英語を使った活動に積極的に参加したり、ALTとのコミュニケーションを積極的に図ったりしている。また、英語を口にすることにあまり抵抗感がないなど、小学校英語活動を経験していない従来の1年生とはその様子には変化が見られる。このことから、中学校では、小学校英語活動の成果を生かした授業で、「英語で話したい」「英語で書きたい」(9)という自己の思いを表現したいという願いをかなえたい。英語を学習することが嫌にならないように、読むことや書くことにおいても、つまづいて困っている生徒には支援ができ、学習意欲を支えられるように考えたい。

そこで、昨年度検討した第1学年の指導計画に続き、今年度は第2学年の指導計画の検討を行う。特に、自己表現活動においての生徒の相互理解を通して、実践的コミュニケーションのあるべき姿を求めて、実践をすすめていくことにする。

第2節 本市の中学校英語学習

(1) 昨年度の研究の課題

昨年度の研究では、平成14年度に京都市教育委員会が編集した「小学校英語活動の指導計画と活動事例集（試案）」(10)をもとに、小学校と接続する中学校第1学年の指導計画に着目し、その検討を行った。小学校英語活動の成果を踏まえ、中学校英語科の目標である実践的コミュニケーション能力の基礎の育成を目指すため、指導計画に3つの視点を取り入れ、授業実践を通して成果と課題を明らかにした。

研究協力校においてアンケート調査を実施し、中学生が英語学習に求めるものと、授業中に困っていることとを探った。その結果、生徒が英語で話したい、英語で書きたいと願いながらもつまづいて困っている姿が見えてきた。(11)小学校英語活動の成果を生かすとともにし、同時に学習内容の変化とともに変わっていく生徒のつまづきに配慮し、さらに「英語で話したい」という生徒の願いを受け止められるような中学校英語学習の授業をつくる必要があると考えた。

そこで、小学校英語活動と中学校英語学習の接続をなめらかなものとするために、3つの視点から指導計画を検討した。

図1-3は、小学校英語活動の成果を生かし、中学校英語学習の目標である実践的コミュニケーション能力の基礎の育成のために大切にしたい3つの視点である。

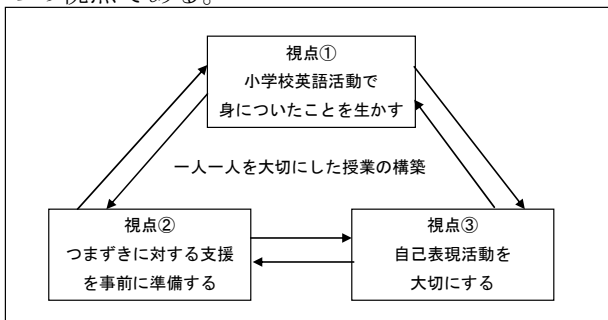


図1-3 実践的コミュニケーション能力の基礎の育成で大切にしたい3つの視点

この3つの視点を、本市の指導計画の留意点に提示した。そして、この指導計画をもとに、研究協力校において、実践授業を行い、授業後には指導計画に修正、加筆をした。

さらに、年間指導計画に位置づけられていた年4回のスピーチに、日々の自己表現活動が生かされるような計画を立てた。その際、豊かな自己表現活動を展開するために、3種類の取組を進めた。図

1-4は自己表現活動を支える3つの取組である。

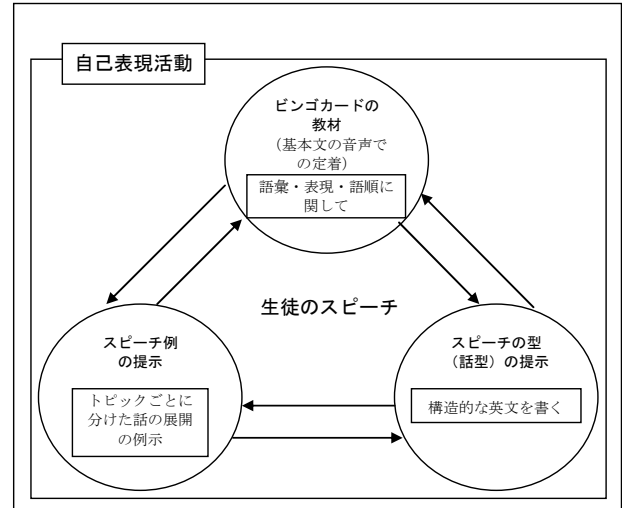


図1-4 自己表現活動を支える3つの取組

スピーチでは、生徒は、ビンゴカードの教材(12)で習得した英文を取り入れることができた。一方、スピーチ例からは、自分に当てはまる表現を見つけたり、言い換えたりすることができた。また、スピーチの型を意識しながら自分の言いたいことをやや構造的に話すことができるようになった。

これらの様子から、スピーチの活動は生徒の学習意欲を高め、学習内容の定着にもつながった。

(2) 英語での自己表現力の指導上の課題

生徒は、自分のことを英語で表現したいと願っている。本項では、英語学習を通して育てたい力の中でも、自己表現力に関する指導上の課題を3つの調査から考えてみる。

1つ目は、平成15年度教育課程実施状況調査の「教科別分析と改善点」(13)でみる。

ここでは、「話す」「書く」についての指導上の課題が挙げられている。

「話す」活動に関して、教師質問紙調査では、「スピーチなどの生徒が自分の気持ちや考えを話す活動を授業で行っていますか」という質問に対して「多くの時間で実施している」または、「どちらかといえば実施している方が多い」と回答している教員は、第1学年は42.6%、第2学年は41.8%、第3学年は43.4%であり、各学年とも40%を超えている。

このことから、話す活動は、各学年とも同じように取り組まれていることがうかがえる。

次に、「書く」活動についてみる。「自分の気持ちや考えなどを書く活動を授業で行っていますか」という質問に対しては、「トピックを与えて複数の文を書くなど自分の気持ちや考えを書く活動

をしている」または「どちらかといえば実施しているほうが多い」と答えている教員は、第1学年は32.6%、第2学年は39.8%、第3学年は46.2% (14) であり、学年が上がるにつれてその割合が増加している。

第1学年では習う語彙や文型も限られているので、自分の気持ちや考えを書く活動の指導は難しいと考えられているのかもしれない。しかし、この時期にこそまとまった内容で話すこと、書くことの指導が必要ではないかと考える。小学校英語活動では「聞く」「話す」という音声を中心に活動が行われていたため、生徒が初めて出会う「書く」ことは、生徒にとっては魅力的ではある。しかし、同時に生徒のつまずきが顕著にあらわれる活動でもあると考えられるからである。まとまった内容を話すためには、書く力が必要である。書くことに関する生徒のつまずきが顕著にあらわれる時期だからこそ、まとまった内容を書く指導の工夫が求められている。生徒一人一人のつまずきを指導者が知ることで、それを指導につなげることができるからである。

同じく、平成15年度教育課程実施状況調査の中で、自己表現力に関する問題の「書くこと」について生徒の解答結果をみることにする。

この問題は、「トピックを与えて自由に書かせるものである。各問題には英文の書き出しが示しており、それに続けて第1学年、第2学年は3文以上、第3学年は4文以上書くことを求めている。書かれている文の数及び内容のつながりという2つの観点から評価し、綴りや格変化などの誤りは意味が理解される限りは許容する」(15)としている。これは、生徒が与えられたトピックの内容を3文または4文以上の英文で構成して自分の考えを書くものであり、自己表現力が試される問題である。

ここでは、第3学年の結果を取り上げる。3年間英語を学習してきた生徒の自己表現力について考えたい。

生徒が与えられたトピックは、「友達のことを紹介する」であり、4文以上の英文を書くことが求められている。報告書では、「設定通過率が55.0%なのに対し、通過率は34.9%であった。また、無解答は25.5%であった」(16)としている。

ここで、筆者が特に注目したのは、生徒の中学校で3年間英語を学習してきた生徒の25.5%、つまり4人に1人が無解答であったことである。「友達の紹介」は、生徒にとっては興味のあるトピックであろう。しかしながら、書けなかった生徒が多い

のは、生徒の学習意欲の低さや、生徒が、書く方法を身につけていないことが感じられ、大変気がかりである。

英語でまとまったことを書けるようになるには、書く練習をすることでしか、その力はつかないと考える。生徒が自分の言いたいことを書けるようになるには、様々な話題に関して、まとまった文章を書く機会を与え、書き方を指導し、書く時間を確保することが必要であると考えられる。

2つ目は、平成17年に、国立教育政策研究所が行った、「特定の課題に関する調査」の中の、「話すことに関する調査」(17)の結果からみる。この調査は、全国的に教育課程の実現状況をみるための、「話すこと」に焦点を当てた、初めての試みであった。下は調査の概要である。

「特定の課題に関する調査（英語：「話すこと」） 中学校 調査の概要」 （国立教育政策研究所）より抜粋
対象学年：中学校第3学年
調査実施期間：平成17年11月～12月
調査実施学校数及び生徒数：33校 1,090人
調査内容：「スピーキングテスト」
質問紙調査（生徒及び教師）

調査は4つのセクションから構成されている。セクション4は、「与えられたテーマについて、一定の時間内にまとまりのある数文を話すことができるか」という、自己表現力に関する問題である。報告書では、「この問題は、『自分の考えや気持ちなどが聞き手に伝わるように話す力』に関するものであり、『好きな季節』について、その季節を選んだ理由とその季節にどんなことをしたいかなどについて話すもの」(18)であるとしている。その結果は、「通過率は32.2%であり、無解答は11.8%であった。誤答と分類した解答は56.0%であり、その内容は、好きな季節だけを述べて終わってしまっているもの、『好きな季節』のあとに『理由』または、『したいこと』をだけを述べて終わってしまい発話が継続できていないもの」(19)であったとしている。

おそらく、生徒にとっては、書くことよりも話すことのほうがハードルは低いと考えられるが、日頃から様々なトピックで構造的に話す練習が必要であり、正しく話すためには、文法や語彙などの定着を図ることも大切であると考えられる。

3つ目は、平成17年12月実施（第3学年）と、平成19年2月実施（第1学年、第2学年）の本市学力定着調査の報告からみる。本市の中学生の自己表現力についてみる。次頁に報告書で述べられている指導課題を示す。

平成17年12月実施, 平成19年2月実施
 学力定着調査結果から見た指導課題 (20)

1. 場面・状況を意識した言語使用に関わる知識の定着
2. 文章や対話の流れの理解力及びそれに応じた表現力
3. 自己表現能力の向上

ここでは, 3. 「自己表現能力の向上」に関する, 各学年の問題と, 結果とを取り上げる。

第1学年では, 「自己紹介」を4文以上で書くことを求めており, 第2学年では, 「あなたのある1日の出来事」を4文以上, 6文程度の英文で書くことを, また, 第3学年では, 「京都のお寺や神社などの観光名所や訪問すべき場所などを紹介する内容のE-mailを4文以上の英文で書くこと」を求めている。いずれも, つながりや, まとまりのある内容で書くようにと明記されている。本調査の結果をまとめて, 表1-1に示す。

表1-1 各学年の「書く内容を考えて英文が書ける」問題に関する回答分類と反応率 (%)

	1年	2年	3年
4文以上 (正確な文・内容・量)	12.1	37.1	9.0
4文以上 (ややつながりが悪い)	6.5	7.9	17.5
4文 (同じ内容の繰り返し)	32.2	12.0	9.6
3文 (内容良し)	2.9	2.9	8.9
3文 (つながり悪い)	10.2	3.8	5.7
2文 (内容良し)	9.8	4.9	11.2
1文	12.5	5.1	2.8
その他	3.7	1.8	5.9
無答	10.0	24.5	29.3

特に, 無答率に着目すると, 1年生では, 10%を示している。内容が自己紹介であるにもかかわらず, 1文も書けない生徒が10%いるということがわかる。また, 3年生での無答率は29.3%である。

報告書では, 指導上の留意点として, 「とにかく日頃から英語で身近なことを表現させるということに継続的に授業の中で取り組んでいくことが大切である」(21)とし, また, 「特に学習に遅れがちな生徒に対しては, まず基本文の口頭練習を十分にさせてから, 口頭練習させた基本文を正しく書かせる。その基本文の一部を変えて自分の身近なことに関する文を作らせるということに継続的に取り組むことが大切である」(22)としている。

これらのことから, 生徒に書かせる指導の工夫が必要であることがわかる。「書くこと」については, 生徒にとっては, ハードルが高いと考えるが, 先にも述べたように, 生徒は「英語を書きたい」と願っているのである。

その生徒の願いに答えるために, 授業のなかで「書く」時間を確保したい。また, 生徒が書いたものを添削する段階ではそれぞれの生徒のつまづきを知り, 指導につなげたい。さらに, 生徒が書いたものについては他の生徒にフィードバックさせる機会をもつことにより, 学習意欲を高めたり, また達成感をもたせたりしたいと考える。

一方, トピックを与えて書かせるときには, 豊富な例が必要である。「まとまりのある文」「つながりのある文」を書きなさいと求められても, 生徒はイメージがつかめないのではないだろうか。生徒が, 「こんなふうに話題を展開していったらいいのか」とわかる例を与え, 自分だったらこんなことが書けたらいいなど意欲をもたせることが大切である。授業では「書く」練習をさせるのであるから, 豊富な例文から自分に合うものを選んで組み立てていくことも, 文章を構成していく力をつけるには大切なことであると考え。はじめから自分で英文を作り, 構成していこうとすると, それだけでも多大な労力を要し, 英語に苦手意識を持った生徒は, 何から始めていいのかわからない, 戸惑い, 指導者が付き添わないと前に進むことが出来なくなってしまうのではないだろうか。「これは英語でどう書くの?」と指導者が質問攻めにあうことが, 筆者の経験でもあった。そのような生徒にとっても, 豊富な英文の例から, 抜き出して, 構成することは比較的容易であると考え。

その際, 生徒が英文を「読める」ことが大切になる。生徒が英文を読めるように, 「読む」ことを鍛える必要があるとも考えている。

また, 文章を書くときの表現方法について, マッピングという手法を改良して取り入れたい。そのことにより, より構造的に英文を考え, 表現が出来るようになることを願っている。生徒のつまづきの姿やその原因は, 昨年度よりも多岐にわたることが予想される。そのつまづきを事前に想定し, 具体的な支援を準備しておきたいと考える。

生徒が, 自己表現活動を通して, 自分の伝えたいことが英語で表現できたり, クラスの友達の伝えたいことを理解したりと, 英語でやりとりをするなかで, お互いを高め合えるような温かい人間関係を築くことはできないだろうか。英語で相手の話を共感的に聞き合う姿から, 互いに影響し合い, 互いに高め合う関係が作れるように指導をすすめたいと考える。

(1) 「小学校における英語教育について」(外国語部会における審議の状況) (案) 文部科学省 中央教育審議会 初等中

等教育分科会 教育課程部会 外国語専門部会（第14回）議事録・配布資料 2006. 3. 27
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyou/chukyo3/siryo/015/06032708.htm 2007. 1. 16

- (2) 前掲(1)
- (3) 「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 2007. 11. 7
http://www.shinko-keirin.co.jp/koutou/pdf/shingi_002.pdf 2007. 12. 10
- (4) 「小学校英語活動実践の手引」2003年4月 文部科学省 2003. 4 p. 5
- (5) 京都市小学校英語活動実践研究グループ『小学校英語活動指導計画と活動事例集（試案）－STEP 1～4－』京都市教育委員会 2002. 11
- (6) 「試案では、言語機能、語彙、場面、話題、活動で構成されたものを『タスク』と呼んでいる。試案では、学習内容として設定された言語機能の具体表現が無理なく自然に聞いたり、話したりされる場面と話題とを児童の生活や学習経験から選択して、活動が組み立てられている。」
直山木綿子『英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとする子どもを育てるための22のヒント 小学校英語活動Q&A』京都市教育委員会 2003. 2 p. 6
- (7) 多田泉「No. 485 実践的コミュニケーション能力の系統的育成を図る英語教育の在り方」『平成15年度研究紀要』京都市総合教育センター 2004. 3
多田泉「No. 495 実践的コミュニケーション能力の系統的育成を図る英語学習の在り方Ⅱ」『平成16年度研究紀要』京都市総合教育センター 2005. 3
- (8) 拙稿「No. 510 実践的コミュニケーション能力の基礎を養う小中一貫した英語教育の在り方を求めて」『平成18年度研究紀要』京都市総合教育センター 2007. 3 p. 77
- (9) 前掲(8) p. 74
- (10) 前掲(5)
- (11) 前掲(8) p. 72
- (12) ビンゴカードの教材は、平成18年6月7日に開催されたNew Education Expo 2006の「『英語が使える日本人』戦略構想」において、福田真人（京都女子中・高等学校 教諭）が紹介した教材「Binglish」をヒントにして筆者が昨年度の研究の中で製作したものである。ここにその実践の積み重ねに対し、改めて感謝します。
- (13) 国立教育政策研究所 教育課程研究センター『平成15年度教育課程実施状況調査 教科別分析と改善点（中学校・英語）』2005. 9 p. 287
- (14) 前掲(13) p. 288
- (15) 前掲(13) p. 292
- (16) 前掲(13) p. 308
- (17) 国立教育政策研究所 教育課程研究センター「特定の課題に関する調査（英語「話すこと」）」
<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/top.htm> 2007. 8. 10
- (18) 前掲(17) p. 39
- (19) 前掲(17) p. 39
- (20) 「学力定着調査報告（中学校 英語）2005年12月」京都市教育委員会 2005. 12 p. 63
「学力定着調査報告（中学校 英語）2007年2月」京都市教育委員会 2007. 2 p. 3
- (21) 「学力定着調査（中学校 英語）2007年2月」京都市教育委員会 2007. 2 p. 26
- (22) 前掲(21)p. 26

第2章 自己表現活動を生かした 第2学年の指導計画の検討

第1節 指導計画の検討

本研究では、第1学年からつながる第2学年の指導計画を検討する。さらに、生徒が筋道を立てた話し方ができることや生徒と生徒とが英語を通して互いに理解を深め合うこと、すなわち、温かい人間関係の結べるようなコミュニケーションを英語でできることを目指すため、自己表現活動に焦点をあてて研究を進めたい。

(1) 第1学年の指導計画の3つの視点

昨年度の第1学年の指導計画は、小学校英語活動からのつながりを大切にするため、また生徒の願いに応える学習にするために、3つの視点から検討を行なった。

視点①「小学校英語活動で身につけたことを生かす」では、音声を先行させ、リズムや動作を伴ったり、また、絵を提示したりする活動を積極的に取り入れた。

視点②「つまずきに対する支援を事前に準備する」では、生徒の学習意欲を支えるため、指導者が、事前に想定される生徒のつまずきを予想し、それに対する手立てを用意しておくことを指導計画に取り入れた。

視点③「自己表現活動を大切にする」では、生徒の「英語で話したい」「英語で書きたい」という願いに応えるため、自分のことを英語で表現する機会を積極的に取り入れた。

小学校と接続する中学校第1学年では、これら3つの視点で指導計画をとらえることが大切であると考えた。

(2) 第2学年の指導計画の視点

今年度も昨年度に引き続き、3つの視点から検討する。その中で、より実践的コミュニケーション能力の基礎の育成を目指すため、とりわけ視点③「自己表現活動を大切にする」に焦点をあてたいと考える。

次頁の表2-1は第2学年の指導計画の一部である。この中には、3つの視点を提示している。視点①では、小学校英語活動を経験してきた生徒たちに育っている態度が生かされるような場面や活動を用意している。また、視点②では、事前に想定される生徒のつまずきを予想し、それに対する支援を用意している。

そして、今年度焦点を当てたいと考えたのが視点③である。その理由は、小学校英語活動を経験してきた生徒たちには、自己表現活動を行う上で、必要とされる態度や姿勢が育っている様子が見うけられることから、この活動で、その身についた態度や姿勢が生かされると考えるからである。このことは、自己表現活動の中で、視点①を意識して取り組めるということである。

また、自己表現活動の場面では、その生徒の理解できているところや、つまづいているところが、その生徒にも、指導者にもはっきりと見える。そのため、自己表現活動の中で、指導者はそれぞれの生徒のつまづきに対する支援が個別に出来ると考えているからである。

このように、自己表現活動の中で、視点①、視点②を意識して取り込みたいと考えている。

第2節 自己表現活動でめざすもの

(1) 自己表現活動とは

教科書には自己表現活動を大切にした学習展開も多く取り上げられている。実践的コミュニケーション能力の基礎を育成するためには、自分の気持ちや考えをもち、自分の意思を示すなどの自己表現力の育成が大切であると考えられる。

自己表現活動を授業に取り入れたときに、その授業はどのような特徴をもつのであろうか。田中は4つの特徴があると述べている。

自己表現活動の4つの特徴(23)	
1.	自分の思いや考えがある授業になる
2.	目的達成の手段として言語活動がある授業になる
3.	他者との関わりがある授業になる
4.	自己との関わりがある授業になる

この4つの特徴を、昨年度から取り組んでいるスピーチの活動に当てはめて考えてみる。

1つ目は、スピーチでは、自分のことや考えていることを、英語で表現することになる。それゆえに、その発表の内容には、その生徒の個性が現れることになり、それを聞き合うことで、生徒同士の相互理解や、さらに、指導者の生徒理解にもつながる。

2つ目は、スピーチでは、自分のメッセージを伝えるために、文字で表現し、それを音声言語で表現することになる。英語を通して、自分の伝えたいことを表現したり、理解する授業となる。

3つ目は、スピーチでは、クラスの友達に向かって発表する。そうすると、クラスの友達から反応が返ってくる。発表者は、その反応から自分のスピーチがどうだったのかと考える機会を与えられる。そのことは、相手を意識した発表のしかたを学ぶことにもなるのである。

表2-1 第2学年 指導計画 Unit 1 Lesson 3

Lesson	Unit 1 Lesson 1 Kenta the Puppy Walker					
単 元 内 容	題材内容: Lesson1 パピーウォーカーの役割 Task 思い出 表現, 言語の働き: be 動詞の過去形, 過去進行形を用いた文 (質問する, 答える), 接続詞 when を使った複文 (説明する)					
時	Part	言語材料	指導過程・内容	実践的コミュニケーション能力の基礎の育成のための留意点	評価規準・評価場面・方法 (下線: 実現状況評価)	観点別評価
3	2 P12 ~ P13	挨拶文, 天候, 過去など	①挨拶, Q&A 活動, ビンゴカードの活動 ②新出語句の導入・練習 フラッシュカードで発音練習, その語句を含む単文を与えリピートさせる。 ③教科書本文の概要把握 Oral Introduction 後 Q&A T or F 等で内容の確認	ビンゴカード中には, 次の文が使われている。 ○ The man was training dogs for blind people. 過去進行形の英文の構造に戸惑ったときには, この例文にもどると説明しやすい。	①質問を聞いて, <u>積極的に英語で答えようとしている。</u> 【観察 (質問)】 ②教師の英語やCDを聞く際, 内容を聞き取ろうとしている。 【観察】 視点①「小学校英語活動で身についたことを生かす」	◎ ○ ○
				過去進行形の英文は, 1年のLesson 7で学んだ現在進行形を復習してから導入する。生徒はbe動詞を抜いてしまう傾向があるので, be動詞と現在分詞の2つで成り立っていることを, 2枚のカードを使うなりして, 視覚にも訴えておくことが大切である。	③教師の英語やCDを聞く際, 内容を聞き取ろうとしている。 【観察】	○
		be 動詞 (過去, 過去進行形) の応答文	④過去進行形を用いた疑問文および応答文の導入, 練習	過去のある時にしていたことを言うときに, 過去進行形が使われる。このことを自己表現を通して学んで欲しい。「昨日9時に何をしていた。」とひとりひとりの生徒に聞き, 生徒とやり取りをしたい。 What were you doing at nine yesterday? I was watching TV. What TV program did you watch? Garireo.	④間違いを恐れずに, 表現練習に取り組もうとしている。【観察】 視点③「自己表現活動を大切にする」	○

*観点別評価: 関: コミュニケーションへの関心・意欲・態度 表: 表現の能力 理: 理解の能力 知: 言語や文化についての知識・理解

4つ目は、スピーチでは、伝えたいことを自分で考えることから、自分のことを振り返る機会になる。また、自分の発表を通して、友達の反応から、改めて自分についての再発見をすることもできる。

このように、自己表現活動が行われる授業では4つの特徴があり、生徒は、自己表現活動を通して、様々なことが経験できる。経験の中で使った英語表現は自分に身近なものとなり、自分の中に確かに定着していくと期待する。このようなことから、1時間毎の指導計画に自己表現活動を積極的に取り入れたい。

また、本市の指導計画で扱われている2回のスピーチ (Unit 1 Project, Unit 2 Project) にさらに、年度の初めの単元であるReview Lesson にも自己紹介のスピーチを加えて、年間合計3回のスピーチを指導計画に位置づける。その第2学年の年間指導計画を次々頁 (p. 12) に提示する。

(2) 自己表現活動を支えるもの

前章では、昨年度の研究から、自己表現活動の中で、特に、スピーチの活動を支える3つの取組をあげた。それらは、「ビンゴカードの教材」、「話型 (スピーチの型) の提示」そして、「スピーチ例の提示」であった。これらは授業での取組である。

さらに、生徒の人間関係からみると、自己表現活動を支えるものとして、クラス内の信頼関係が挙げられる。ここでは、自己表現活動を支えるものとして、「英語の授業での取組」と「クラス内の信頼関係」の2つの面から述べることにする。

まず、「英語の授業での取組」に関しては、指導者が、自己表現活動を生徒にさせたいと思い、生徒も自分のことを英語で表現したいと思っても、生徒に英語の学力や表現する力がついていないと難しいと考える。具体的に言えば、生徒にある程度の基本文が身につけていないと自分の伝えたいことを英語で表現することは難しいのである。この力が十分ついていないために、生徒によっては、自己表現活動を十分行うことができず、意欲を失ってしまうこともあると考える。自己表現活動を行うには、生徒に少なくとも音声における基本文の定着が望まれる。

そこで、昨年度の研究の中で「ビンゴゲームを生かした教材」を開発した。このビンゴカードを使った活動を継続して行うことにより、音声においての基本文の定着が望める。また、英文を読む活動を伴っているので、英文を読む力も鍛えられると考えている。

表現する力については、話型を生徒に提示することで、表現のしかたを示すことができる。話型とは小学校の教育活動で用いられているもので、話し方の型である。昨年度は「スピーチの型」を英文で提示した。話型はスピーチの型だけではなく、会話にも取り入れることが出来ると考え、今年度はスピーチ後の感想や、発表者からのコメントにも取り入れることを考えている。

ビンゴカードを使った活動で、定着している基本文を含んだスピーチ例をトピックごとに豊富に生徒に与える。このことにより、自分ならどのような表現ができるのか、どのような展開ができるのかのモデルとなり、生徒が原稿を作るときに参考になるようにする。このように、このスピーチ例を読むことができれば、英語の苦手な生徒も、自分に関する英文を集めたり、少し変えたりして、原稿をつくることを考えている。また、できるだけ既習の語彙を使い表現させたいと考える。なぜなら、未習の単語や表現を使っても、相手に伝わらないことが考えられるからである。スピーチ例に限らず、自己表現活動の中で、生徒に豊富な例を示すことは、生徒の持っている力を引き出すことにつながると考えている。

次に、「クラス内の信頼関係」について述べる。

太田は「どんなに稚拙なものであっても教師や友人が自分の言葉に必ず耳を傾けてくれる、笑顔で応じてくれるという安心感が、言語学習の環境には不可欠である」(24)と述べている。自己表現活動は教室の中で行われる。生徒は自分のクラスの友達に対して、自分の伝えたいことや考えることなどを伝えることになる。そのクラスの友達が自分をどのように受け止めてくれるのかは、自己表現を行おうとする生徒にとって、気になるものである。生徒は、クラスの友達が自分を肯定的に受け止めてくれると感じると、安心して生き生きと自己を表現しようと思うだろう。また、雰囲気が悪いと、あたりさわりのないことで済ませてしまおうとするであろう。自己表現活動において、クラス内の雰囲気、つまり、信頼感は英語力・表現力とともに、大きな要素である。

しかし、その信頼感は自然発生的には作られないと考える。意図的な指導を継続し、学級活動や授業など様々な活動の中で生徒同士が交流を深めることで、雰囲気が少しずつつらんでくるのではないだろうか。太田は「コミュニケーションが果たす役割の一つが信頼関係の構築、修復である」(25)と述べている。英語の授業でも、自己表現活動で

のコミュニケーションを通して、これまで話したことのない生徒と話したり、クラスの友達の意外な面を発見したり、自分と同じことが好きであるとかわかったり、自分と友達の個性を理解し合うことができるであろう。

中学生は、多感な時期にあり、自分が友達からどのように思われているのかを気にする生徒は多いと思われる。クラスの中にはいろいろな生徒がいる。自己表現活動を通して、その友達のことを肯定的に受け止め、その友達から影響を受けたり、また自分もクラスの友達に影響を与えたりするなかで、クラスの信頼感が生まれてくるのではないだろうか。

自己表現活動では、自分を見つめ、自分の個性を理解し、他者の個性にも気づく。また、クラスの友達との相互理解を促すことができる。自己表現活動を行った後はクラスの友達とこの活動を振り返ることにより、より相互理解を深めることにつながると考えた。相手を肯定的に受け入れる第一歩は「相手の話に耳を傾ける」ことである。このことについては、次項で詳しく述べることにする。

(3) スピーチを通してめざすもの

昨年度は、日々の自己表現活動を土台にして、年間4回のスピーチに取り組んだ。その結果、筋道を立てた、内容的にも深いスピーチをする生徒の姿が見られた。

今年度は、日々の自己表現活動を土台として、年間3回のスピーチに取り組んだ。さらに構造的な表現となるように指導し、また、スピーチ後にクラスの友達とコミュニケーションを英語で行うことにも挑戦したいと考えた。

第2学年の年間指導計画では、第1回スピーチを、Review Lessonの中で「自己紹介」をテーマに行った。

第2回スピーチは、Unit 1のProjectで「夏休みにがんばること」をテーマとして取り組んだ。従来の指導計画では「夏休みの予定」であったが、単に予定を述べるのではなく、自分が何をがんばりたいと思っているのか、それはなぜなのかを考えさせるため、このテーマにした。

第3回スピーチは、Unit 2のProjectで「私の夏休みと私の夢」をテーマとして取り組んだ。従来の指導計画では「夏休みの思い出」であったが、夏休みにしたことを述べるだけでなく、自分が夢に向かってがんばっていることも考えさせたい

との思いから「私の夏休みと私の夢」と設定した。

このように、それぞれのスピーチでは、自分の思いを伝えられるようなテーマを設定しているが、英語で自分の言いたいことを伝えたり、友達のスピーチを聞いて理解できたりするというだけでは十分とはいえないと筆者は考える。単に「話す」「聞く」という一方向のコミュニケーションに留めるのではなく、双方向のコミュニケーションにつなげ、人と人がつながるような取組になることを期待している。

これらの3回のスピーチを通して次の5つの姿を目指したいと考えた。

スピーチを通して目指したい姿

1. 自己を見つめようとする姿
(自分の考えを整理する)
2. 構造的に表現しようとする姿
(言語能力を高める)
3. 相手を受容しようとする姿
(話に耳を傾ける)
4. 内面的に深まろうとする姿
(聞き手を通しての自分の再発見)
5. 人とつながろうとする姿
(共に学び、高まろうとする)

1つ目は、「自己を見つめるようとする姿」である。生徒がスピーチの原稿を書くときには、自分を深く、静かに見つめて欲しいと思っている。普段の生活で、中学生が自分について深く考えるのはどんなときだろうか。時には、自分を見つめることは勇気がいることで、表面的にしか考えようとしなかったりするのかも知れない。しかし、スピーチの原稿を考えることで、自分を深く見つめて欲しいと考えている。自分はどんなことをがんばりたいと思ひ、なぜがんばりたいと思っているのか、どんなことを得意としているのか、何を目標にして、どんな人間になりたいと思っているのかを考えさせることで、自己を見つめさせたい。また、自分は何を大切にしているのか、どんな人に囲まれて生活しているのか、そして、自分はその人たちのことをどう思っているのかを考えることで、他者のことも見つめさせたい。それは、自分や自分を取り巻く人々のことを見つめ直したり、自分の周りの人々と自分との関係性を捉え直すことで、自分の存在がはっきり見えてくるからである。

そして、考えるだけではなく、それを文として表現して欲しい。なぜなら、自分の書いたものを見たときに、自分の考えていたことが、はっきりと見えてくるからである。普段は、深く見つめる

【第2学年 英語 年間指導計画表】(教科書:教育出版 ONE WORLD English Course 2)

視点①「小学校英語活動で身についたことを生かす」丸枠
 視点②「つまずきに対する支援を事前に準備する」太枠
 視点③「自己表現活動を大切にす」点線枠

月	単元	学習項目	指導内容	実践的コミュニケーション能力の基礎の育成のための留意点	評価方法	関	表	理	知
4月	Review Lesson (6H)	Unit1 ビンゴカード ・1年生の復習 ・第1回スピーチ	・過去形(一般動詞)を使った文	2年生になって初めて一緒にクラスになる友達もいることであろう。等身大の自分を表現して欲しい。スピーチ例は、第1学年とR. L. の文法事項を入れ、動詞の過去形を使ったものにより、自分のスピーチに使わせたい。	ワークシート スピーチ		○	◎	○
5月	Unit 1 Lesson 1 (7H)	・過去の様子、過去にした事についての説明、その応答 ・過去のある状況を説明	・be動詞(was, were)の文、疑問文とその応答 ・過去進行形 ・接続詞(When)を使った文 ☆Task	過去進行形の文では、表現をするときに、be動詞が抜けてしまうという傾向がある。現在分詞に意識が集中してしまうからである。be動詞と現在分詞で一つの意味になると印象付けるために、カードを2枚使って視覚的に生徒に訴える。また、自分のことを表現させてみる。“What were you doing?”と昨日のある時間を決めて、表現させるなどする。 接続詞whenを使った文では、接続詞の位置でつまずくことがある。接続詞はその文の文頭にくることを、意味をとりながら例示する。日本語では「～のとき」はその文の後ろにくるので、日本語との対比も指導する。	観察 テスト	◎	○	◎	○
6月	Unit 1 Lesson 2 (12H)	・予定についての情報交換をする ・未来の事についての説明 ・第2回スピーチ	・be going to ～の表現 ・will ～の表現 ・動名詞(主語・目的語) ☆Task	Unit 1のProjectで扱われているマッピングを改良して、生徒がまとまりのある英文を書けるように工夫する。生徒のより深い自己表現を促すため、「夏休みにがんばりたいこと」というテーマにして、スピーチを行う。英語で感想を言ったり、発表者からコメントを言ったりすることに挑戦する。	ワークシート テスト	○	○	◎	○
7月	Reading (4H)	・まとまった文(対話型式)を読む	・復習教材及び慣用表現	Unit 2のProjectでは夏休みの思い出のスピーチが扱われている。第2回スピーチとつなげるため、「私の夏休みと私の夢」というテーマにし、夏休みにがんばったことや自分の夢をスピーチで表現させたい。夏休みの課題として取り組ませる。スピーチ前には、マッピングや原稿を添削し、個別に指導をする。画用紙で作品にする。また、スピーチのあとには、感想を言わせたり、書かせたりと、スピーチすることにより、生徒の相互理解が深まる取組にしたい。	スピーチ	○	◎		
8月	Unit 2 Lesson 3 (8H)	Unit2 ビンゴカード ・第3回スピーチ ・将来の夢を話したり、理由や目的などを説明する	・不定詞(名詞用法)(副詞用法)(形容詞用法) ☆Task 職業の単語は小学校英語活動で扱っている。	形容詞的用法の不定詞は、名詞の後置修飾構造の一つであり、日本語にも訳しにくく、生徒にとって難しい用法である。教科書の基本文では文が長いので、次のような短い文で説明を始める。(I want some water to drink.) have to～, has to～の発音は、言い慣れる中で定着させたい。 Shall I～, Will you～, Would you～など、Pleaseをつけた命令文よりも丁寧な言い方である。相手や状況によって、このような丁寧な表現を使えるようになってほしいと思う。Taskでは、生徒同士でこのような表現を使わせたい。	リーディング テスト	○	○		
9月	Unit 2 Lesson 4 (12H)	・必要があるかないかを表す。又、人の意向や感じたことを表現する	・have to～, don't have to～の文 ・助動詞の疑問文とその応答 ☆Task	I want to be ～の表現は小学校英語活動で扱っている。	ワークシート スピーチ 観察	○	○	○	
10月	Unit 2 Lesson 4 (12H)				テスト		○		○

月	単元	学習項目	指導内容	実践的コミュニケーション能力の 基礎の育成のための留意点	評価方法 ・場面等	関	表	理	知	
11月	Unit 3 Lesson5 (7H)	Unit 3 ビンゴカード ・大きさなどの比較	・形容詞の比較級, 最上級 ・ Which+名詞+be 動詞+~er, A or B ? ☆Task	比較級の-erとmoreの使い分け:3音節以上の形容詞・副詞と2音節以上の形容詞・副詞で次の接尾辞のつく語はmore型。 (-ing, -ous, -ful, -less, -ive, -able, -ic, -ly) 生徒は, 形容詞の語彙はまだ少ないので, 言い慣れるなかで定着させたい。 最上級の-estとmostの使い分けも同じ。 最上級のあとに, 「~の中で」という副詞句をつける場合に使用する前置詞ofとinの使い分けは, of+数, in+所属する集団である。これも, 言い慣れるなかで定着させたい。ビンゴカードにもこの副詞句を含む英文を使っている。	テスト			◎	○	
		Unit 3 Lesson 6 (11H)	・比較して好みを言う ・物のある場所などの説明 ☆Task	・副詞の比較, 最上級 ・ There+be 動詞+~ ☆Task	「どちらが好きか」と聞かれたときの応答では, 理由を付け加えることができるように, 「理由は2つあります」などと, 語型を生徒に提示して理由を言えるようにする。より深い自己表現が可能であり, 生徒の相互理解も深まる。	ワークシート テスト	○	○	○	○
12月	Unit 4 Lesson7 (6H)	Unit 4 ビンゴカード ・その場にはいない人について説明する ・勧める時のことば ・相手に確認する	・主語+動詞+間接目的語+直接目的語 ・接続詞 if ・付加疑問文 ☆Task	目的語を2つとることのある動詞では, 「動詞+人+物」の語順である。「動詞+物+to 人」の語順でも同じことが言えることをActivityで視覚的にも比較したい。また, ビンゴカードには, この両方の英文の例を使っている。 接続詞ifを使って, 自己表現に取り組むことができる。Taskでは, ペアやグループで文をつなげることに挑戦したい。	ワークシート テスト	○	○	○	○	
1月	Unit 4 Lesson 8 (11H)	・自分の考えを言う ・理由をたずね, 情報交換する ・理由を説明する	・主語+動詞+目的語 (thatで始まる節) ・ Why ~ ? に対する返答のBecause ・接続詞 because ☆Task	接続詞becauseは1年時より使ってきたが, 接続詞のbecauseは文と文をつなぐときに使う。返答のBecauseの場合のみ文頭に来るということをここで, 指導する必要がある。 Chat Corner 4 では, 好きな季節を, 理由をつけて言う。相手の言ったことに同意する表現も合わせて指導したい。	ワークシート テスト 観察	○	○	◎	○	○

*以下は, 生徒の興味・関心に応じて選択して指導する教材です。必要に応じて活用してください。

月	単元	学習項目	指導内容	実践的コミュニケーション能力の 基礎の育成のための留意点	評価方法 ・場面等	関	表	理	知
2月	R.F.P.	Unit 4 ビンゴカード Reading 2 The Tezuka Osamu Story	手塚治虫の伝記を読む	長文を読む。ビンゴカードの英文はこの2つの話からも取り入れている。それらのカードの英文の意味がわかると, 全文のだいたいの意味を想像できるようにカードを作っているのだから, 事前にビンゴカードの活動をしてから, この学習に入りたい。	ワークシート	○		○	
3月	F.R.	A Thanksgiving Dinner	第2次世界大戦中に収容所に入れられていた日系人のユキの一家の物語を読む		ワークシート	○		○	

ことのない自分について考えることは、自分探しをするという中学生のこの時期だからこそ大切にしたいと考える。

2つ目は、「構造的に話そうとする姿」である。第2回スピーチからは、本研究で改良したマッピングを用いる。教科書に紹介されているマッピングを、生徒の思考の流れに沿ったマッピングに改良した。生徒がより構造的に話ができるように活用したい。そのために、生徒には、マッピング例、スピーチの型、スピーチ例を提示し、生徒が原稿を書くときに、取り組みやすくする。これらのことは、生徒が原稿を書くときにつまづかないようにするための支援でもある。コミュニケーションを深める上で、英語で構造的に話せたり書けたりすることは、大切なことであると考えられる。

校内研究の中心として、国語教育を24年間続けている、京都市立第三錦林小学校の研究紀要には、「日常の言語活動で使用される言語様式は『談話言語様式』と『操作言語様式』からなっている」(26)と示されている。

談話言語様式とは、少数の親しい特定者を対象に行なわれる会話で使われる言語様式であり、具体的な状況のなかで使用されるものである。例えば、単語だけで表現したとしても、場面や状況、お互いの表情などで理解することが可能な言語様式である。

一方、操作言語様式とは、主に不特定の人とコミュニケーションをするときに使用するもので、現実の場面を離れても伝えることができ、文字文化を基礎としたものである。例えば、単語だけではなく、文にして表現したり、文と文を関連付けるなど、構文として整った言語様式である。

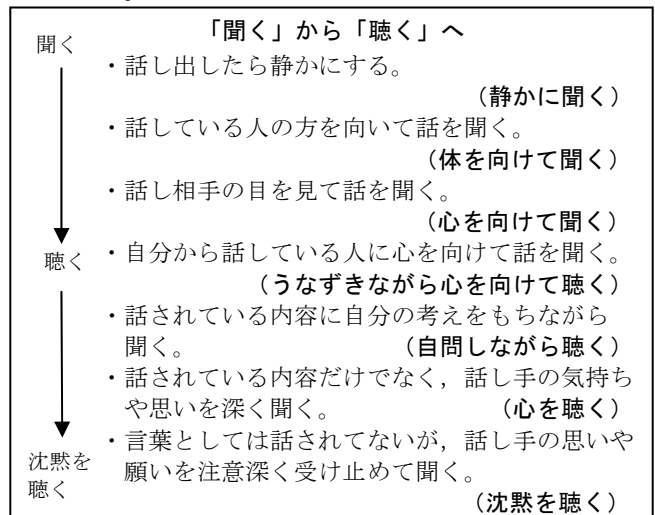
中学校2年生は、英語を教科として習い始めて1年が経過したころである。習得している語彙や文型は限られているが、生徒にはこの構文として整った操作言語様式で、英語を使って話したり書いたりできるようになって欲しいと考えている。伝えたいことを羅列するのではなく、文と文のつながりを考えて、筋道を立てた文章が書けるように、また、それを話せるようになって欲しいと願っている。そのことで、自分の思考を深められ、また、聞き手にも伝わりやすくなるのである。思考を深める言語能力の育成をも視野に入れ、スピーチを通して、生徒の英語での言語能力を高めたいと考えている。

また、英語での言語能力を高めるということは、生徒の日本語での言語能力にも関連するので

はないかと期待している。英語や日本語を含めた言語能力を高めることをも視野に入れたい。

3つ目は、「相手を受容しようとする姿」である。よりよい人間関係を築く基礎は、温かいコミュニケーションであると考え、相手を肯定的に受け入れ、相手から学ぶという姿勢を育成したい。

コミュニケーションの基本は相手を受け入れながら「聞く」ことである。井上は学びのしつけで、「聞くことに対するルール作りと『聞く』から『聴く』へ計画的・系統的に指導する」とし、「『聞く』ということは、単に黙らせるということではない。話し手を受け入れながら『聴く』ことの大切さを指導する」(27)ことを強調している。相手を受け入れながら聞くことが、スピーチの発表者の自己表現力を高めることにもつながると考える。この「聞く」から「聴く」への系統的指導をまとめる。



このように、英語を理解するために聞くだけではなく、そのスピーチをしている友達が何を言いたいのか、どのような思いで、話しているのかに、耳を傾けて欲しいと思う。

発表者が話し出したときに、クラスの友達が自分の話をうなずきながら、自分のありのままを受け入れながら、自分が言葉に表すことが出来なかった思いまで聴き取ってくれたなら、どんなに嬉しいと感じるであろうか。聞き手に対して感謝の気持ちを持つと同時に、「私も、聴こう」という思いにつながると予想する。そこから、クラスが、お互いが高まりあう集団、学び合いの集団に変わっていくのではないだろうか。生徒によっては、英語で上手に表現できないこともあるかもしれない、しかし、その生徒のありのままを受け入れて欲しいと思う。このようにして、相手の話に耳を傾けて、相手を受け入れながら「聴く」ことが、

クラスによりよい人間関係づくりの手がかりになると考える。コミュニケーションをする上では、相手を受容する態度を特に大切に指導したい。

4つ目は、「**内面的に深まろうとする姿**」である。自分がスピーチとして話した内容を、クラスの友達が聞き、友達の表情を見たり、友達からの質問や感想を受けたりして、あらためて自分について振り返るということである。他者を通しての自分の再発見である。相手と深くかかわることや、相手の反応を通して自分がより深く見えてくるのである。つまり、自分では気づかなかった視点からの感想や意見を聞くことで、そのことについて気づいたり、考えを深めたりできるということである。例えば、自分の夢や、将来の希望についてのスピーチで、クラスの友達からの感想や意見を聞くことで、自分では意識していなかったこともあらたに見えてきたり、自分の思い込みに気づいたりすることもあるだろう。このように、クラスの友達を通して自分をより深く見つめる機会にもなると考えている。英語学習を通して、自分を学ぶことができるのである。

ブーバーは「人間は〈なんじ〉に接して〈われ〉となる」(28)と言っている。自分は、一人では本来の自分とはいえない。一人では自分を見つめることには限界がある。自分のありのままを受け止めてくれる人を通して、自分が深く見えてくる。相手と関係性を結ぶ中で、自分という存在がはっきりと見えてくるということである。卒業時に進路選択の時期を迎える中学生が、自分の適性を考える上で、このような人との関係性の中で自分を見つめることは大切なことであると考えている。

5つ目は、「**人とつながろうとする姿**」である。生徒が発表者を肯定的に受け入れることで、クラスにいる様々な個性を持った友達から、何かを学ぶことができれば、今までとは違った目で相手を見ることができであろう。また、そのことで信頼関係も深まるのではないだろうか。

コミュニケーションは、「話をする」「関わる」というためだけではなく、互いに「人」が「人」として出会うことである。コミュニケーションをする中で、温かい人間関係が築いていけるのである。

中学生の時期には、特定の友達と深くつきあうという姿が見られるのではないだろうか。しかし、仲の良い友達だけではなく、いろいろな個性を持った人とも人間関係を築いて欲しいと願っている。学校の教育活動のなかで、そのような、人と

人とがつながる活動を用意することは、中学生のこの時期には必要なことではないかと考える。

コミュニケーションを英語で行うということにも意義がある。生徒は、英語で話すことで、普段は見せない姿も見せることがある。それは、家族や友達への感謝であったり、友達への賞賛であったりと、英語だから言えることもあるのではないだろうか。「英語で言うから、照れずに言える」「日本語では恥ずかしいと思うことでも、英語では思い切って言える」こともあるだろう。

このように、年間3回のスピーチを通して5つの姿を目指したい。図2-1はスピーチを支える3つの取組とスピーチで目指す生徒の姿である。

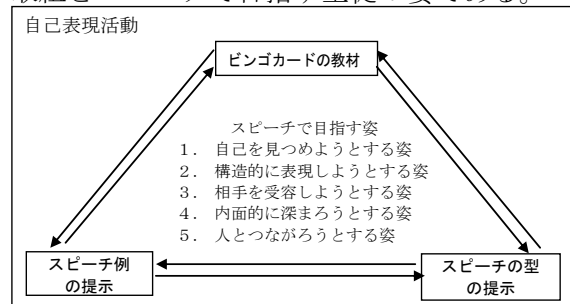


図2-1 スピーチを支える3つの取組とスピーチで目指す生徒の姿

(4) ビンゴカードの教材でめざすもの

前章で述べたように、スピーチの活動では、自己表現活動を支える3つの取組として、「ビンゴカード」を使った活動、スピーチの型の提示、そしてスピーチ例の提示を行った。その中のビンゴカードについて詳しく述べる。

目的は、先に述べた、音声における基本本文の定着である。

取組場面は、生徒が、授業のはじめの5~7分を使って取り組む。毎時の指導計画では「前時の復習」にあたる時間である。

方法は、ビンゴゲームに似ている。各生徒が、16枚のカードを持ち、各自の机の上に縦、横4枚ずつ、自由に並べる。指導者が英語で読んだキーワードを生徒は絵と文字を見てさがし、リピートしながらカードを裏返す。カードの裏面には、そのキーワードを含む英文が書いてあり、指導者の発音のあとに、その英文を読みながらリピートする。16枚のカードのうち、指導者は12枚まで読む。裏返したカードが縦、横、ななめとビンゴになっている数を競う。

ルールが簡単で、全員が「いくつビンゴになるか」という同じ目標を持って取り組める活動である。偶然性によって、ビンゴの数がきまり、それ

を競えることが、生徒にとって飽きることなく活動を継続できる鍵ではないかと思われる。生徒の英語の学力によって、結果に差が出ることがないのも特徴である。リズム感のある英語を聞いたり、発音したりすること、カードに絵を伴っていること、文字を見て英語を発音することが継続されること、自分でそのカードを見つけて、裏返すという動作を伴うこと。この4つのことが、生徒の英文の記憶の保持を支えると考えられる。

この活動では、「英語が読める」「英文を覚えられる」「語順が定着する」という効果と、「自己表現活動につなげるもの」として期待している。

「英語が読める」については、生徒のつまずきは、英語が読めないことから始まるのではないかと考えているが、そのつまずきに対する手だての一つとして有効であると考えられる。

ビンゴカードに使われる英文の内容は、教科書のユニットごとに合わせて作っている。生徒がUnit 1を学んでいるときには、Unit 1の中に出てくる英文をカードに使っている。そのため、この活動では5～7分という時間で、Unit 1に出てくる重要な英文を繰り返し音読していることになる。結果的に、音声での予習と復習を短時間に行っていることになる。例えば、そのユニットのはじめのほうを学んでいるときには、カードのほとんどの英文が予習となる。学習が進み、そのユニットの真ん中ぐらいを学んでいるときには、カードの英文の半分が復習、半分が予習となる。そして、ユニットが終わるところにはカードのほとんどの英文は復習となっているのである。

このようなことから、生徒は、この活動を継続して行うことにより、今までに習った英文や、これから習う英文が読めて、大体の意味が分かるようになる。その結果、生徒が教科書を開いたときに、未習の内容でも、いくつかの英文は読めて、意味がわかっている状態で授業の導入が行えるのである。しかも、その読めて、意味が分かる英文は基本文であり、本文の中でもキーとなる英文であることから、内容理解の手だてにもなるのである。

英語が読めるようになるには、生徒が文字を見て発音する機会を多くもつことである。それも、生徒が飽きることなくできるような工夫が必要である。ビンゴカードを継続して使うことにより、生徒は英文が読めるようになっていくと考える。基本的な英文が読めると、英語に苦手意識をもっていた生徒も、例えば、テストが配られ、問題を

見たときに「読める英文がある」ことで、「やってみよう」と意欲が高まるとも考えられる。教科書や黒板を見たときに読める英文があることは、英語に苦手意識をもっている生徒にとって、英語を身近に感じるという点では重要なことである。

「英文を覚えられる」については、前述したように、ビンゴカードの活動は、音声、リズム、絵、動作を伴っており、継続して取り組むため、生徒の記憶に残りやすいと考える。キーワードを聞く絵が思い浮かび、絵をみると英文が口から出てくるという状態になることを期待している。

「語順が定着する」については、カードには単語ではなく英文を使っているためである。生徒のつまずきの一つに、「単語は覚えても使い方が分からないので、文にできない」(29)というものがあった。中学生が英文を自分で作る際には、覚えている基本文で語順を確かめ、伝えたい内容の英文を作ると考えられる。ビンゴカードで基本文が定着していれば、それを応用することができることを期待している。

ビンゴカードを使った活動は、音声のみで継続して取り組むが、「書くこと」につなげることもできる。カードの英文をディクテーションに使うことも可能である。

「自己表現活動につなげるもの」としては、覚えた英文を使って自分のことを表現することやスピーチの活動に取り入れることもできる。昨年度の研究の中で、生徒たちはビンゴカードで使った英文をもとにしてスピーチ原稿を書く姿が見られた。自己表現で使ったカードの英文が自分の言葉として、それぞれの生徒に定着することを願っている。

(23) 田中武夫・田中知聡『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』大修館書店 2003.12 p.11

(24) 太田光春「実践的コミュニケーション能力の育成を目指した英語教育の展開」『中等教育資料No.850』文部科学省教育課程課 2007.3 p.72

(25) 前掲(24) p.72

(26) 京都市立第三錦林小学校「子どもたちのおかれている状況から出発し子どもたちに届く教育実践を求めて」『平成19年度 京都市立第三錦林小学校 研究紀要』2007.11 p.44

(27) 井上新二『授業力向上にむけて大切にしたい視点』京都市総合教育センター カリキュラム開発支援センター 2006.3 p.13

(28) マルティン・ブーバー『我と汝・対話』岩波書店 1979.1 p.39

(29) 前掲(8) p.74

第3章 心と心をつなぐ自己表現活動の 実践事例

第1節 スピーチにおける指導

昨年度の研究協力校の生徒と研究協力員の先生に、今年度も研究協力を依頼している。2年生は、昨年度検討した指導計画をもとに授業を受けていた生徒である。

今年度も2年生は少人数授業のため、1クラスの人数は18人～20人である。

(1) 第1回スピーチ「自己紹介」

生徒がスピーチ原稿を作るための指導

Unit 1を学ぶ前の、Review Lessonでは、第1学年の復習が中心の内容で、新出事項はいくつかの不規則変化をする動詞である。この単元に、第1回のスピーチを位置づけ、「自己紹介」をテーマとして行うことにした。このスピーチは、本市の指導計画には扱われていない。しかし、6クラスある学年で、クラス替えがあり、クラスのメンバーも変わっていることから、この時期にぜひ行いたいと考えた。自己紹介のスピーチを通して、自分を表現できること。そして、スピーチ後にそのスピーチの内容について受け答えをすることによって、生徒同士が交流して欲しいと考えた。

生徒には、今回のスピーチの目標を3つ提示した。

第1回スピーチ「自己紹介」の目標

- 2年生になって、はじめて同じクラスになる人に、自分のことを英語で紹介しよう。
- 今までに習った単語や文を使い、みんながわかる英語で自分のことを話すことに挑戦しよう。
(25～30文)
- クラスの友達のスピーチを聞き、感想を言ってみよう。(英語と日本語で)

2年生は、昨年の第1学年の指導計画のUnit 2が終わった段階で、自己紹介のスピーチを30文程度で行っている。スピーチをこのテーマ、この長さで書くことは、生徒にとっては1年生の復習であり、新しいことではない。今回の新しい取組は、「クラスの友達のスピーチを聞き、感想を言ってみよう」である。昨年度は、スピーチ後に、そのスピーチの内容に関しての質問やそれに答える学習をした。しかし、「感想」を述べるのは初めてである。

生徒が感想やコメントをするための指導

感想は、次の3つの点について述べさせた。

スピーチの感想の目標

- はじめの1文は英語で言う。
- スピーチを聞いてわかったことを言う。(日本語で)
- スピーチを聞いて、思ったこと、自分に生かしたいと思うことを言う。(日本語で)

1つ目の、「はじめの1文は英語で言うこと」については、スピーチに対する感想を表現する形容詞を指導し、自由に使えるようにした。この英文での感想は、第2回スピーチで、英語で感想を述べることにつなげたいと思っている。指導した形容詞は以下のものである。

生徒に提示した、英語での感想の表現

- Your speech was (very) interesting. (興味深い)
 Your speech was impressive. (印象深い)
 Your speech was great. (とてもよい)
 Your speech was nice. (素敵)
 Your speech was good. (よい)
 Your speech was wonderful. (素晴らしい)
 Your speech was useful. (役に立つ)
 Your speech was fantastic. (すごい)
 Your speech was amazing. (驚くべき)
 Your speech was marvelous. (見事な)
 Your speech was valuable. (価値のある)
 Your speech was invaluable. (計り知れないほど貴重な)

多数の形容詞を指導しておくことで、自分で選んで使えるようにした。また、このような表現を言い慣れるため、Unit 1のビンゴカードには、次の2枚のカードを入れておき、毎時間の初めに、繰り返し音読をする機会をもつことにした。2枚のカードは以下のものである。

ビンゴカードに入れた英文

- 1-14 Your speech was impressive.
 I liked your way of speaking.
 1-15 Your speech was interesting.
 You like fishing. I like it, too.
 (番号はカードの通し番号、下線部はキーワード)

2つ目の「わかったこと」と3つ目の「思ったこと、自分に生かしたいと思うこと」については、指導者が述べて欲しいと思う感想の話型を生徒に提示した。小学校での話型



図3-1ビンゴカードで活動する

を活用した授業での発言やスピーチの経験を生かしたいと考えたからである。次頁にその話型と、その話型を使つての例文とスピーチ例を記す。

スピーチの感想の話型

- 1 Your speech was (very) ~
- 2 わかったことを表現するために
~君 (~さん) が~だということがわかりました。
~君 (~さん) の~に対する気持ちがわかりました。
- 3 思ったこと・自分に生かしたいと思うことを表現するために
それを聞いて、私は~だと思います。
(私は~したいと思いました。私は~を生かしたい
と思いました。)

スピーチの感想に対するコメントを言うための話型

- 1 感想を言ってくれた人にお礼を言うために
スピーチの感想を言ってくれてありがとう。
- 2 感想を聞いて思ったことや、相手に対して励ましたりするために
~という感想を言ってくれて嬉しいです。
~ということが伝わってよかったです。
~君 (さん) も~をがんばってください。

このような、応答は当初は堅苦しくなるかもしれないが、この話型を手がかりにしながら、それに縛られることなく使いこなす姿をめざしたい。英語ではまだ難しいことかも知れないが、日本語でなら十分できるのではないかと考えた。生徒がスピーチを通してこのようなやり取りをするこ

話型を使つての例文

スピーチ後の生徒の応答例

- ~君が部活にかける気持ちが伝わってきました。
→伝わってよかったです。ありがとう。
- スリーポイントシュートを試合で打ったのには驚きました。
→ありがとうございます。シュートが入ったときは自分でも嬉しかったです。
- ~君の欲しいものは、CDプレーヤーだとわかりました。お姉さんとは聞く音楽が違うので、自分のものが欲しいといっていました。姉弟で1つのもを使うのは難しいと思います。
→自分のCDプレーヤーが欲しいです。その気持ちをわかってもらえてよかったです。

とで、生徒同士の交流ができ、お互いの心の中の距離が近くなっていけばと願っている。また、生徒には「こんな会話が英語でできたらいいね」と言っておき、次のスピーチで、英語での感想を言う意欲をもたせたいと考えた。

スピーチ例の一部を下に記す。スピーチ原稿を生徒が考えるときに、生徒が参考にするトピックや英文を豊富に示してある。実際に生徒に提示する例はこのスピーチ例の約2倍分である。その内容は、中学2年生が興味や関心のあると思われることをトピックに選んだ。部活のこと、友達のこと、

生徒に提示したスピーチ例の一部

Hello. My name is Susumu Yamada. Please call me Susumu.

I have two topics.

The first topic is about my favorite sport.

バスケット
スリーポイント・シュート
好きな雑誌マンガ

- Basketball is my favorite sport. I'm on the basketball team. Do you like basketball? I love it very much. Every day I play it after school. I have a good time with my teammates. We sometimes have a game. In games, we can't stop running. We pass a ball and run forward. "Run forward" means Maeni-hashiru. It is very hard but I enjoy passing a ball and running. So I like basketball.
- Yesterday I got a three-point shot. I was very happy.
- I like reading a basketball magazine. It is "Chugaku Basketball". I like reading "Slam Dunk", too. It's a comic book about basketball.

The second topic is about my favorite song.

Yuiのチェリー
宝物
お年玉でゲット

- I like music. Now my favorite song is CHE.R.RY by Yui. Because I like her voice. It's nice. Do you like this song?
- My treasure is my portable music player. Every day I listen to music.
- I have my portable music player. So I always listen to my favorite songs. It's very nice. I bought it with Otoshi-dama.

something to want
I want a CD player. Do you have one? We have one in my house. But I want my CD player. I always can listen to my favorite songs. My sister always listens to rock music. But I like popular music. So I want my CD player in my room

Thank you. (36 文)

好きな曲のこと、大切にしている物のこと、家族のこと、飼っているペットのことなどをトピックとして取り上げた。この時期には、まだ第2学年のUnit 1のビンゴカードに使っている英文は定着していないと思われたので、スピーチ例には第1学年で学んだ表現を使った。また、昨年度に、生徒が言いたいことが表現できるように、理由や原因を述べることができるようにbecauseやsoを、単語の説明を付け加えることができるようにmeanを指導したが、それらの単語もスピーチ例に入れ、今回も生徒が使えるようにした。

授業と並行して、第1回のスピーチの説明を行い、原稿を書く時間として、授業の終わりの約10分をあてた。「今日は、書きたいトピックを決めましょう」など毎時間の小さな目標を積み重ねて書き、生徒からの質問にも答えながら進めた。生徒同士で話し合う姿も見られた。

スピーチの前の時間の指導

友達のスピーチをどのように聞くのかを、指導した。前章で述べたように、スピーチでめざす姿の一つに、「相手を受容しようとする姿」を挙げている。温かいコミュニケーションは相手を肯定的に受け入れることから始まると考えていることから、前章で述べた『『聞く』から『聴く』へ』の7項目を黒板に掲示し、指導した。生徒は「心を聴く」までは、理解を示していたが、「沈黙を聴く」では、初めて聞く話であり、驚いているように見えたので指導者より意図を説明した。

(2) 第2回スピーチ

「夏休みにがんばりたいこと」

生徒がスピーチ原稿を作るための指導

Unit 1のProjectでは「マッピングをもとにスピーチしよう!」というテーマでスピーチが扱われている。教科書に設定されている目標は、「夏休みの予定について、50語程度のスピーチ原稿を書くことができる」であり、例文として提示されているスピーチは9文で55語である。

このスピーチを本研究では、生徒の個性が表れるような内容にしたいと考え、テーマを「夏休みにがんばりたいこと」と設定した。またマッピングについては、構造的に英文を書くことができるような、生徒の思考の流れに沿ったマッピングに改良した。そして、生徒には、20文程度のスピーチ原稿を求めた。

マッピングの説明は、プリントを使用した。右上はそのプリントの内容の一部である。

Unit 1 Project

「マッピング」をもとにスピーチしよう!

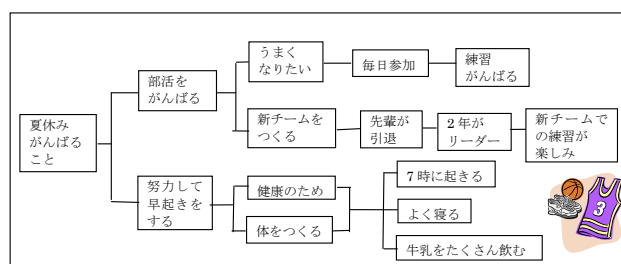
第2学年第2回スピーチ

夏休みが近づいてきました。どんな夏休みにしますか?どんなことに挑戦し、どんなことをがんばりたいと思いますか。思い出に残る夏休みにしたいですね。この夏休みにやってみたいことを2つ決めましょう。そして、あなたの夏休みにがんばることを20文程度の英語で話してみよう。

原稿を書く前に、書きたいことを決めて、マッピングを作ってみよう。自分の考えも整理しやすく、相手にもわかりやすいスピーチの原稿が書けるよ。

Let's try!

次は、生徒に提示したマッピング例の一部とスピーチの一部である。



My summer vacation plan

I'm going to tell you about my summer vacation plan.

I will try two things this summer.

The first topic is about basketball.

- I'm on the basketball team. This summer I'm going to go to practice basketball every day. And I'm going to practice it very hard because I want to play it well.
- After the tournament, our Sempai will leave the team. We will make a new team. I'm looking forward to practicing in the new team. We are in the eighth grade. So we'll be the leaders of the team.

The second topic is about getting up early.

- I'm going to get up at seven every morning this summer. It's good for my health.
- I want to be tall and strong. So I'm going to get up early and sleep well. I'm going to drink a lot of milk, too.

Thank you for listening. (18文 150語)

スピーチ原稿の例は2種類用意し、トピックごとのマッピングと英文は6種類用意した。トピックの例に用いたものは、中学生が夏休みに取り組みたいと思うことを予想して、「水やり」「風呂洗い」(家事分担に関して)、「お菓子作り」「釣り」「読

書」(趣味に関して)、「長崎への旅行」(旅行に関して)「市内大会」(部活動に関して)夏休みの宿題「復習」(学習に関して)を取り上げた。

マッピングと、スピーチ原稿の作成は授業と並行して行った。そこでは、質問の時間を設けた。生徒にとって、このテーマで原稿を書くのは初めてのことであったが、スピーチ例を見ながら自分が夏休みにがんばりたいことを決めて、書き進めることができた。

この時期は、前期の中間テストが終わった頃でもあり、「勉強をがんばりたい」という生徒もおり、復習をすることをトピックに挙げる生徒もいた。

また、今年の夏休みに、あまりに多い宿題に悩まされたことを思い出し、夏休みの宿題を早く仕上げたいというトピックの例に共感して、取り上げる生徒も見られた。

部活動では2年生が中心になることから、多くの生徒は部活動をがんばりたいと思っているようであった。

生徒が英語で感想やコメントをするための指導

英語で感想を言えるためには、その感想の話型を教える必要がある。夏休みに、これをがんばると言う友達を励ましたり、その友達のがんばりたいという姿から学んだということをやったりするには、そのような表現を生徒に知らせて、音声として定着させなければ、実際には使えない。

そこで、ビンゴカードを活用した。次は、ビンゴカードに追加したカードの一部である。

英語で感想を言うために

1-21 Your speech was very nice.
You really like soccer and practice it hard.

Keep it up!

I'll practice kendo hard, too.

1-22 Your speech was fantastic.

You are making efforts.

It's wonderful.

1-26 Your speech was amazing.

I learned many things from you.

発表者がコメントをするために

1-29 Thank you for listening.

We will win the game.

I'll do my best.

1-30 I'm glad to hear that. Thank you.

I will enjoy my summer vacation.

(数字はカードの通し番号で下線はキーワード)

Unit 1 のビンゴカードを毎回の授業で使っていたが、そのビンゴカードの中に、「感想を言うためのカード」と「発表者からのコメントをするためのカード」を合計10枚作り、毎回の活動に加えて、繰り返し練習をした。

全体的に英文が長く、言い慣れない英文も多

かったが、生徒はゲーム感覚で、楽しみながら、発音する姿が見られた。

スピーチの前の時間の指導

今回のスピーチでは、生徒に次の4つの目標を示した。

第2回スピーチ「夏休みががんばること」での目標

1. スピーチに関する感想を英語で言う。
2. わかったことを英語で言う。
3. 英語で感想を言ったり、質問をする。
4. 感想に対して発表者はコメントを英語でする。

目標の1については、前回と同様の表現を取り入れた。「～だと思う」という表現が学習済みであったことから、感想にもこの表現を加えた。例えば、Your speech was very nice, I think. または、I think your speech was very nice. と表現するようにした。このことにより、自分の意見や思いを述べるときの表現を実際に経験させたいと考えた。また、今後もぜひこの表現を使って欲しいと考えている。

目標の2では、今回は日本語で取り組んだ部分である。今回は、スピーチをよく聞き、主語をYouに変えて言うことを指導者から指導した。例えば、I'm going to practice tennis every day. というスピーチに対して、You are going to practice tennis every day. と、聞いた文がそのまま使えるという指導をした。

目標の3では、8つの場面を考えて、その気持ちを伝える表現例を、ビンゴカードで練習した英文を使った表現で生徒に提示した。以下は生徒に提示した例文の一部である。

感想や質問の表現例の一部

〈英語で感想を言ったり、質問をしたりしてみよう〉

- ・ 「部活をがんばると言う友達に」
You really like soccer and practice it hard.
Keep it up! I'll practice kendo hard, too.
「サッカーが好きでがんばっているのですね。がんばれ！僕も自分のやっている剣道をがんばるよ。」
- ・ 「友達のがんばる姿に自分もがんばろうと思ったとき。」
I learned many things from you.
「スピーチを聞いて、あなたから学びました。」(自分もがんばろうと思ったという気持ちを含んで。)

目標の4については、4つの場面を考えて、その気持ちを伝える表現例を生徒に提示した。次頁に生徒に提示した例文の一部を示す。

発表者から、英語でコメントをする

- 自分のスピーチに対する感想にお礼を言うとき
Thank you for your comments.
I'm glad to hear that. Thank you.
- 「がんばれ」と応援してくれたとき
We will win the game. I'll do my best!
- 「楽しんでね」とか「がんばって」と言ってくれたとき
I will enjoy my summer vacation.

このように、ビンゴカードで練習をしている英文が、どのような場面で使えるのかということをご指導者から生徒に、具体的に指導した。一方、発表をする順番は希望順とし、前の時間には発表をする生徒と、その生徒に対して感想を言う生徒を2人あらかじめ決めておいた。

(3) 第3回スピーチ

「私の夏休みと私の夢」

生徒がスピーチ原稿をつくるための指導

Unit 2 のProject では、「夏休みの思い出をスピーチしよう!」というテーマでスピーチに取り組む。設定された目標は、「夏休みについて、具体的な情報を入れてスピーチすることができる」である。教科書のスピーチ例は、14文で79語である。

ここでは、指導者と相談し、生徒が夏休みががんばったことや、自分の夢をテーマにすることにしました。スピーチ原稿は、夏休みの課題として扱うことにした。第2回スピーチと関連のあるものにするので、取り組みやすいものとした。また、自分の今後の姿も考えて欲しいと思い、自分の夢についても書けるように、テーマを広げた。

そして、夏休み後の授業で、スピーチをすることにした。スピーチ原稿のチェックは、夏休み後に行い、それから、画用紙に絵や写真を沿えて英文を書き、提出させることにした。

今回のスピーチでは、3つの目標を設定した。

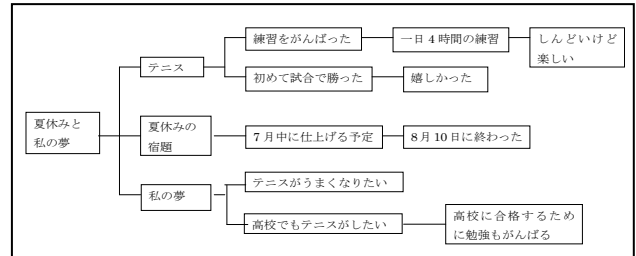
第3回スピーチの目標

- 自分の夏休みのことや将来の夢などを英語で書いて、絵や写真をつけて、作品にする。
20文から30文を目標に書く。
- 英文を書く前に、書きたいことを決めてマッピングを作る。
- スピーチを聴いてわかったことや感想を書く。

スピーチを行う時期が、前期の期末テストの時期でもあり、発表を聴き合うのに十分な時間が取れないと予想された。スピーチの時期を遅らせることも考えられたが、テーマが夏休みのことであつたため、話題がずれてしまうことになるので、やはりこの時期に行いたいと考えた。そのため、スピーチ後のやり取りを簡素化した。スピーチ後

の感想は、一人一人に感想やコメントをそれぞれが書き、全員のスピーチが終わったら、その人に対する感想をまとめて渡すことにした。

スピーチ例は、マッピング例と一緒に提示した。以下は提示した、マッピング例とスピーチ例の一部である。



My Summer Vacation and my dream

I'm going to tell you about my summer vacation.

I have three things to tell you.

The first topic is about tennis.

I practiced tennis very hard this summer. We practiced it for four hours a day. I was very tired but I enjoyed practicing. I won a game for the first time. I was happy.

The second topic is about my homework.

I tried to finish it in July. But I didn't finish it. On August 10, I finished it! I was happy. Last year I finished it at the end of August. So it was good for me.

The third topic is about my dream.

I want to be a good tennis player. So I will practice it hard. In high school I will play tennis. Now I'm studying hard to pass the high school examination. I'll do my best!

Thank you. (22文 143語)

スピーチ例は、トピックごとのマッピングと英文を提示した。トピック例には、「私の夢」「旅行」「お菓子作り」「読書」「つり」「学習」について取り上げた。

スピーチ前の授業の指導

第1回スピーチと同様に、指導者より、もう一度「聴く」に関する指導をした。スピーチ後には、

スピーチの内容についてわかったことや、感想を一言ずつ書くことを説明した。アドバイスを書くときには、「ここをこんなふうにしたらもっとよくなる」という書き方を



図3-2 スピーチを聴く生徒

をするということを指導した。

スピーチの順番については、今回も希望制とし、自分のかいた絵や英文を、クラスの友達に見せながらスピーチをした。

第2節 自己表現活動における生徒の姿

(1) 第1回スピーチ～第3回スピーチを終えて

スピーチを3回行う中で、生徒のスピーチはどのように深まってきたのであろうか。実際のスピーチの様子を3人の生徒を例に挙げて紹介する。

A君の第1回から第3回スピーチ

〈A君の第1回スピーチ〉

A君は英語に興味・関心が高く、部活動もコミュニケーション部という英語とコンピュータ関係の部に所属している。

Hello. I'm A. Please call me A.
I have three topics.

The first topic is about my treasure.

What is your treasure? My treasures are my books. Last Saturday I bought a new book. It's "Tantei Garireo" by Higashino Keigo. I like his books. His books are interesting. I have seventy books. I love reading.

The second topic is about something to want.

I want a computer. Do you have one? We have one in my house. But I want my computer. I can always play computer games. So I want my computer in my room.

The third topic is about my dog.

I have a dog. His name is Iggy. He is a Shih Tzu. Every day I play with him. It's my job. I don't have any brothers and sisters. So Iggy is like my brother.

Thank you. (29文 140語)

以下はスピーチ後の感想やコメントである。

生徒1 ・ Your speech was interesting.

犬の名前は「イギー」と言っていましたが、どうしてつけたのですか。

→ 「イギー・ポップ」という人の名前からとりました。

生徒2 ・ Your speech was very good.

犬を飼っていることがわかりました。僕はダックスフントを飼っていますが、犬の種類はなんですか。

→ シーズです。

生徒3 ・ Your speech was good.

本が好きと分かりました。どうしてガリレオが好きなのですか。

→ 科学現象を扱っているからです。

生徒4 ・ Your speech was good.

犬を飼っていることがわかりました。僕は犬を飼っていないけど、かわいいと思います。A君の犬はかわいいですか。

→ いたずらばっかりしているけど、かわいいです。

生徒5 ・ Your speech was great.

本を読むことが好きだということがわかりました。

今言った作家のほかにどんな作家が好きですか。

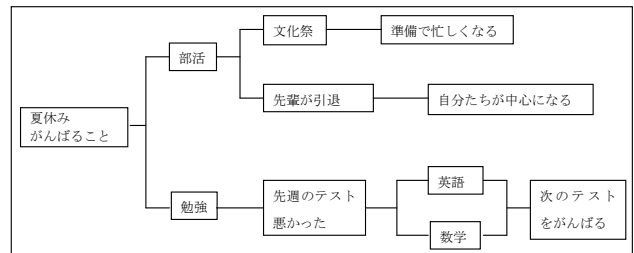
→ 村上春樹の本が好きです。

生徒6 ・ Your speech was very good.

コンピュータゲームと犬が好きだとわかりました。どんなゲームをやっていますか。

→ オンラインのRPGや、冒険系のゲームです。

〈A君の第2回スピーチ〉



My Summer Vacation Plan

I'm going to tell you about my summer vacation plan.

I will try two things this summer.

The first topic is about English.

I'm in the communication club. We will have a school festival. This summer we will be busy because we have much work for the school festival. After the school festival, our Sempai will leave the club. So I will become a leader of the club soon.

The second topic is about study.

My tests were bad last week. So this summer I'm going to study hard every day. First, I'm going to study English. Second, I'm going to study math. And I want to try hard for the next tests.

Thank you for listening. (15文 117語)

Unit 1の目標 9文 55語

以下はスピーチ後の感想やコメントである。

生徒1 ・ Your speech was interesting.

You are going to communication club. Keep it up!

→ I'll do my best. Thank you.

生徒2 ・ Your speech was great.

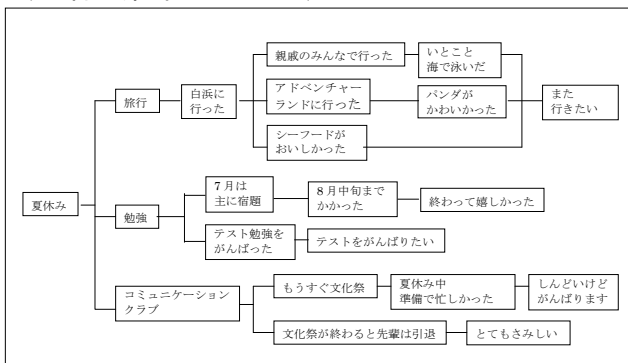
You'll try (to) study hard. I will try to study hard, too. Keep it up!

→ Thank you for listening and your comments. I'm glad to hear that. Thank you.

部活動で、自分たちが中心となりがんばりたい

というA君が、「がんばれ」と声援を送られ、「ありがとう、ベストをつくすよ」と言っている。これは、定型表現を活用した応答である。互いに励まし合うという内容は、日本語で言うのは、この年齢では少し照れてしまうこともあるだろうが、英語でなら自然に言えるのではないだろうか。A君は後のアンケートで「友達からの感想がとても嬉しかった」と述べている。

〈A君の第3回スピーチ〉



My summer vacation

I'm going to tell you about my summer vacation.

I have three things to tell you.

The first topic is about a trip.

I went to Shirahama with my family, my grand parents and my cousin's family in August 5. I went to ADVENTURE WORLD. There were many exciting attractions at that place. I loved the panda. I ate sea food. It was very delicious. I swam with my cousins in the sea. The sea was very beautiful. I want to visit Shirahama again.

The second topic is about study.

I did my homework in July. I finished my homework in the middle of August. I was happy when I finished it. I studied for the next test. I want to try hard for it.

The third topic is about my club.

I'm in the communication club. We will have a school festival soon. We were very busy preparing for a school festival during the summer vacation. I was very tired. We are very busy now, too. I'll do my best!! When the school festival is over, our seniors will leave. I'll miss them.

Thank you. (28文 186語)

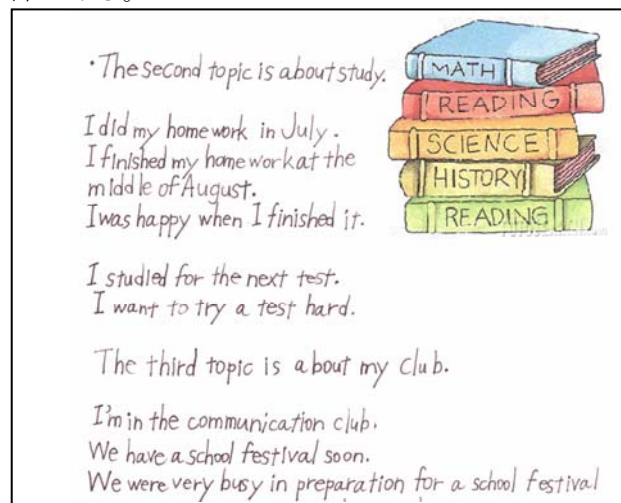
Unit2の目標 14文 79語

第3回スピーチでは、構造的に、内容をよく考えで書いている。改良したマッピングを書くことで、構造的に考えることができたのではないかと考える。今後は、このマッピングを見ながら豊かな自己表現ができるよう



図3-3 感想を書く

になって欲しいと願う。これは、A君の記述の一部である。



B君の第1回スピーチから第3回スピーチ

次に、「英語がやや苦手」と感じているB君の第1回から第3回のスピーチを紹介する。

〈B君の第1回スピーチ〉

Hello. I'm B. Please call me B.

I have three topics.

The first topic is about my sumo team.

I'm on the sumo team in my school. We practice sumo every day. We have a sumo wrestling ring. It means "Dohyo". It is unusual. Because many schools don't have sumo wrestling rings. We have twelve members in our club. They are very friendly. I like sumo practice and my team mates.

The second topic is about my friend.

I have many friends. My best friend is E. He is on the baseball team. He can play baseball very well. Now he is playing baseball. He is my best friend.

The third topic is about my favorite sport.

Baseball is my favorite sport. But I don't play baseball. So I enjoy watching it. Do you like baseball? Baseball is an exciting sport, I think.

Thank you. (28文 145語)

B君は、自分の所属する部活動のことを紹介している。学校には土俵があるが、そのような学校は珍しいので、そのことをぜひ書きたかったのである。また、同じクラスのE君のことについても書いている。このスピーチを聞いたE君は嬉しく思ったのではないかと思う。

次は、スピーチ後の応答である。

生徒1 ・Your speech was great.

野球が好きだけど、やらないということがわかりました。僕は野球が嫌いなので、どこがいいかわからないんですけど、野球のどこが好きですか。

→僕は打つところしか見てないので、打って、ホームランが入ったときに面白いなあと思ったり、守備でもファインプレーが決まったときに面白いなあと思います。まあ、また見てください。

生徒2 ・Your speech was good.

B君が相撲をがんばっていて、相撲が、とても好きだということが分かりました。僕は、おもしろいと思わないけど、どこがおもしろいですか。

→僕も相撲は面白いと思ったことない。(笑い) なんです。(自分が) 今、相撲をやっているかわからないんです。でも、技とかは見ててもおもしろいです。また、大相撲があるので、よかったら見てください。

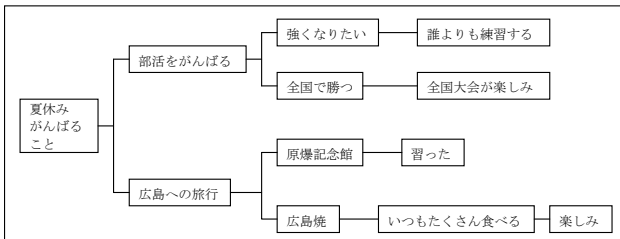
生徒3 ・Your speech was very good.

相撲が好きで、相撲をやっていることがわかりました。相撲部の中で、誰のつっぱりが痛いですか。

→F先生です。

スピーチ後の応答は、和やかで、B君の素直な人柄がよく現れているような応答であった。B君が野球が好きなのは意外だったようで、普段はB君と話すことのなかった生徒も、普段気づかない一面を知ることができたのではないだろうか。

<B君の第2回スピーチ>



My Summer Vacation Plan

I'm going to tell you about my summer vacation plan.

I will try two things this summer.

The first topic is about sumo.

I want to win the match in a big tournament this year. So I will practice it every day.

I want to be a good sumo wrestler. I'll never give up. I'm looking forward to the big tournament.

The second topic is about my summer trip to Hiroshima.

I'm going to have a trip to Hiroshima with my family. I want to visit the Atomic Bomb Memorial Dome because I studied about it.

I will eat Hiroshima-yaki with my family. But we always eat too much. I'm looking forward to visiting Hiroshima.

Thank you for listening. (15文 119語)

Unit 1の目標 9文 55語

以下は、スピーチ後の応答である。

感想 生徒1

Your speech was interesting, I think.

You will going(go) to Hiroshima.

When will you tournament? (When is your tournament?)

→Not it. (Not yet. /I don't know the schedule.)

Thank you for your comments.

感想 生徒2

Your speech was wonderful, I think.

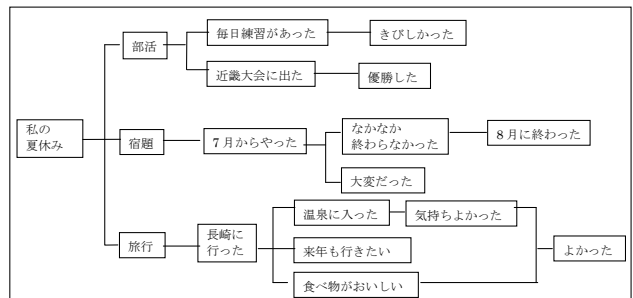
Good for you.

→Thank you for your comments. Thank you.

生徒1の質問には、すぐには答えることができなかった。「まだ、知りません」「まだ、決まっています」と伝えたかったが、どう言えばいいのかわからずに、戸惑っていた。周りの生徒の助けを借りてなんとか答えることができた。

生徒2の感想では、「よかったね」と言われて、どう答えるか迷っていたが、「ありがとう」と比較的すぐに答えていた。生徒2が言った、「よかったね」の意味が理解できていたようである。

<B君の第3回スピーチ>



My summer vacation

I'm going to tell you about my summer vacation.

I have three things to tell you.

The first topic is about my club.

I practiced sumo every day this summer. It was very hard but I enjoyed it. Then we had a Kinki meeting. We did our best. And we won the match. I was very happy. I will get a championship next year, too. I had a good memory this summer.

The second topic is about my summer homework.

I did my summer homework in July and August. But it was hard. When I finished my homework on August 22, I was very happy. I will finish it early next year.

The third topic is about a trip.

I went to Nagasaki with my family. We went to a spa. It was very good. Then I ate delicious food. The horsemeat was particularly delicious. We were very happy. I want to go there next year.

Thank you for listening. (25文 160語)

Unit 2の目標 14文 79語

B君のマッピングを見ると、あらかじめ書きたいことを整理して書いていたことがわかる。筆者と話したときには、「英語は結構苦手です」と言っていたB君であるが、スピーチの型やスピーチ例、毎時間取り組んでいたビンゴカードの英文を手がかりとして、自分が伝えたいことを英語で書いて、記述量も十分であった。内容も、B君にしか書けない内容となっていた。今後、B君がスピーチを通して英語に関心を持ち、英語を好きになって欲しいと願っている。

〈Cさんの第1回スピーチ〉

Cさんは、英語には興味がある方だが、おとなしく、活動に対してはやや消極的な面がある。昨年度の研究でも「Cさん」(30)として取り上げていた生徒である。

Hello. I'm C. Please call me C.

I have two topics

The first topic is about my brass band club.

I'm on the brass band in my school. I play the euphonium. We practice our instruments every day. We have about sixty members in our band. We enjoy our brass band club. I have a friend. Her name is S. She is in the brass band club, too. She plays the horn. S is my good friend. She is interesting.

The second topic is about my birthday.

My birthday is April 13. My family gave me some nice birthday presents. I got a cell phone from my father and my mother. I got a CD from my sister. It was Ai Otsuka's album. I was very happy. My birthday was April 13, Friday. Thirteenth Friday is Jason's day. It means a bad day. So I was a little sad.

Thank you. (28文 151語)

以下はスピーチ後の感想や質問である。

生徒1 ・Your speech was very nice.

吹奏楽部でユーフォニウムをやっていることがわかりました。ユーフォニウムをはじめたのは中学ですか。

→はい、そうです。

生徒2 ・Your speech was very nice.

吹奏楽部だということがわかりました。Sさんとは中学で会ったのですか。

→ はい、そうです。

生徒3 ・Your speech was very good.

Sさんと仲がいいことがわかりました。SさんはCちゃんから見てどんな人ですか。

→ しっかりしていて、おもしろい人です。

生徒4 ・Your speech was very great.

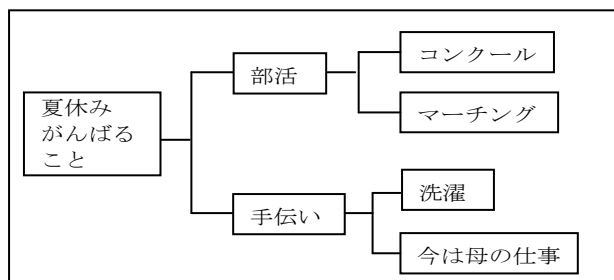
妹がいることがわかりました。

→ 姉が2人います。RとJです。

部活動について、毎回書いているが、内容が変わり、いろいろな表現を取り入れることに挑戦し

ている。

〈Cさんの第2回スピーチ〉



My Summer Vacation Plan

I'm going to tell you about my summer vacation plan.

I will try two things this summer.

The first topic is about my brass band club.

I'm in the brass band club. We will have a contest at Kyoto-kaikan, No.1 Hall. We will practice "THE SEVENTH NIGHT OF JULY" and a march, "BLUE SKY" for the contest. I want to get a gold prize. So I will practice every day. In August I will practice hard, too. I'm looking forward to joining the contest.

The second topic is about washing.

This summer, washing will be my job. Now washing is my mother's job. My family had five members. But now it has three members. So there are few things to wash.

Thank you for listening. (17文 125語)

Unit 1の目標 9文 55語

以下はスピーチ後の感想やコメントである。

〈感想とコメント〉

生徒1 ・Your speech was nice.

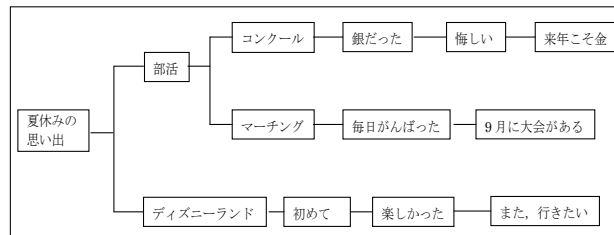
You practice (in) your brass band hard.

Keep it up!

→ We'll win the contest. I'll do my best.

スピーチ後のやり取りについては、定型表現にとどまっているが、意味の通るやり取りができています。今後この話型を使いこなして欲しいと願っている。

〈Cさんの第3回スピーチ〉



My summer vacation

I'm going to tell you about my summer vacation.
I have two things to tell you.

The first topic is about my brass band.

We had a brass band contest. We had a contest of the brass band. I practiced hard every day. But we got the silver prize. I cried for several days. Next year we will get the gold prize. The brass band contest is over. We will have a marching contest for the first time. We will have the marching contest in September.

The second topic is about my summer memory.

I went to Tokyo Disneyland. I went to the Disneyland for the first time. A lot of people were there. I met Pooh, Mickey Mouse and so on. I enjoyed many attractions. I watched a parade, shows and so on. I walked a lot and got tired. But I want to go to the Disneyland again and again.

Thank you for listening. (22文 156語)

Unit2 の目標 14文 79語

Cさんのスピーチから、夏休みは吹奏楽部で金賞をめざしてがんばって練習していたのに、「銀賞だったので悔しい、来年こそは金賞を」という思いが伝わってくる。Cさんは、昨年度からスピーチでは、必ず部活のことを話していた。今後も、自分の好きなこと、伝えたいことを、より深く、英語で話せるようになって欲しいと願っている。

(2) 成果と課題

(ア) ビンゴカードの教材

ビンゴカードを使った活動では、「英語が読める」「文の中で単語を覚えることができる」「語順が定着する」「自己表現活動に使える」などを期待しながら続けて取り組んできた。生徒はこの活動をどのように感じていたのかをアンケートを通して聞いてみた。

図3-1はビンゴカードの活動が楽しかったかを聞いた集計結果である。

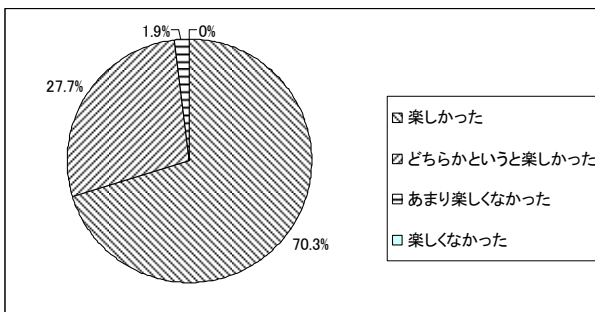


図3-4 「ビンゴカードの活動が楽しかったですか」
対象：2年生155人 時期：平成19年 10月

昨年度の6月から活動を始めて、1年4ヶ月たっているが、今も飽きることなく楽しんでいる様子が見える。この教材を開発した当初は、「生徒が

飽きないだろうか」という心配をしていたが、今も楽しんでいると思われる。今年度は試験的に、3年生でも取り組んだが、1、2年生と同じで、「楽しんでいる」という反応であった。

どのようなところが楽しいと感じているのかを聞いてみた。以下は生徒の記述の一部である。

「どんなところが楽しかったですか」

できる・わかる

- ・英文を理解して覚えられるところ。
- ・英語がすらすら読めるようになるところ。

友達と一緒に

- ・みんなで声を出して読むところ。
- ・ビンゴの数を勝負するところ。
- ・ビンゴの数だけマップを進めるのが楽しい。

自分で

- ・自分で並べたカードでビンゴするのがわくわくする。
- ・めくったりするのが楽しかった。

以上のように、生徒が、「楽しい」と思う活動には、いくつかの要素があることがうかがえる。その活動をすることによって、何かが出来るようになったり、わかるようになったりすると実感できること、その活動が、クラスの友達と一緒にできること、最後に、自分が能動的にその活動に関われることの3つではないだろうか。ビンゴカードの教材はそれらの要素を満たしていたと考えられる。今後、教材を開発していくときには、この3つの要素を意識して作ることが大切だと考える。

次に、ビンゴカードは、語順を定着させるのに役に立っているのかを、生徒にアンケートを通して聞いてみた。

図3-2は、ビンゴカードが語順を覚えるのに役に立ったのかを聞いた集計結果である。

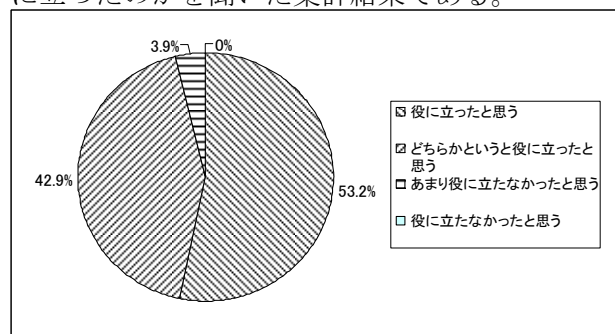


図3-5 「ビンゴカードが語順を覚えるのに役立ちましたか」
対象：2年生155人 時期：平成19年 10月

生徒は、英語の勉強をするときに、まず単語の勉強をする。語彙を定着させるのは大切なことであるが、その単語を文の中で使えるかということ、そうではない。そこには、まだステップが必要だからである。単語を英文の中で覚えることができれば、きっと応用できるようになる。基本的な英文を文のまま覚えることで、自然に語順も定着す

ると考える。

生徒に、「ビンゴカードの活動でよかったこと」を聞いてみた。以下はその記述の一部である。

語順が覚えられた

- ・ビンゴカードで繰り返し英語を言ったので、語順が大体わかるようになった。
- ・ビンゴで動詞の位置が覚えられた。

ビンゴカードの英文を使える

- ・ビンゴカードで覚えた文や単語を、ビンゴとは違う場所で活用することが出来た。発音の練習ができ、それを使って英語を話したりできた。
- ・スピーチの原稿を作るときに、ビンゴカードで習った英文を使えるので、作るのが楽になった。
- ・こんなときは何と表現すればいいんだろうと思っていてわかったりする。英文を作るときにビンゴカードの英文から工夫できる。

授業の予習になる

- ・教科書で習う、難しくて読みにくい英文をビンゴカードで読んでみると、授業がやりやすかった。
- ・教科書より先に、文の読み方などがわかる。
- ・英文や単語が覚えられて授業についていける。

復習になる

- ・教科書の中で、少しわかりづらいとか、もう少し練習したいと思ったときに、楽しく覚えられた。
- ・普段の授業の中で、知らないあいだにビンゴカードの英文が言えているのに驚いた。

このように、生徒は、ビンゴカードを使った活動が、実感を伴って役に立つとわかっている。そのことが、この活動を飽きることなく続けられるものにしていて考える。3年生にもこれらの項目でアンケートをとったが、結果はほぼ同じであった。このことから、この教材は1年生から3年生まで同じような効果があると考えられる。

次に、指導者にもこのカードの活動に取り組んでみてどのように思ったのかを聞いてみた。

ビンゴカードを取り入れてよかった点

- ・生徒が飽きずに取り組める。
- ・音声指導に大変有効であった。
- ・生徒が、「スラスラ読める」「速く読める」「文の意味がわかるようになる」などの点が自覚できるので、自信につながる。
- ・新出の文法事項がスムーズに導入できた。
- ・つまづいている生徒の手立てとして有効であった。
- ・生徒を英語モードにするのに役に立った。

ビンゴカードの課題

- ・「書く」活動につなげるような指導の工夫。

取り組んでみての感想

- ・声に出して正しく読むことが、英語学習、語学習得に有益であると、生徒の姿を見て、あらためて気づかされた。

試験的に取り組んだ3年生の指導者からも、次のユニットでもカードを使いたいとの申し出があり、1年間継続して取り組むことができた。

今後も、改良を加え、生徒が楽しい、役に立つと思える教材にしていきたいと考えている。

(イ) スピーチ

3回のスピーチに取り組んだ中で、第2回スピーチからは、改良したマッピングを取り入れた。生徒は、マッピングで書きたいことをあらかじめ構成しておくことで、自分の書きたいことが明らかになり、書き進めることが出来たと考えられる。スピーチの型を使い、トピックを決めて書くことで、まとまりのある内容を書くことができた。さらに、自分の考えていることをマッピングに表し、目に見えるようにすることで、生徒の思考を助けたと考えられる。また、順序だててスピーチが作られているため、聴くときにも理解しやすかった。

さらに、指導者にとっても、原稿をチェックするときに、生徒が何を書きたいと思っているのかが、的確にわかり、指導につなげることができた。

英語の応答については、第2回スピーチ後の英語での応答について、生徒にアンケートを通して聞いてみた。「英語で感想やコメントを言ってもらいましたが、どのように感じましたか」という質問に対する生徒の記述の一部を紹介する。

よかった

- ・質問されたことに上手く答えられなかったけど、英語で簡単な会話ができてよかった。
- ・難しかったけど、自分たちで答えることができてよかった。
- ・自分の言ったことを英語で返してもらったのがよかった。
- ・かっこいいと思った。
- ・友達と英語で感想や質問をすることで、英語が深まったり、友情が深まった。
- ・普段、日本語で感想を言われるのとは違う感じがして楽しかった。
- ・友達とのコミュニケーションで、自分は英語が好きになってきたと思う。

嬉しかった

- ・英文を考えて、下書きしてくるのではなく、その時に応じて英語が話せて嬉しかった。
- ・英語は片言だったけど、嬉しかった。
- ・相手が言っている英語の意味が理解できたとき、とても嬉しかったです。
- ・英語で話したことが、英語で返ってくるのが嬉しかった。また、すごくかっこいいと思った。
- ・自分の暮らしのことを英語で発表して、英語がぐんと身近に感じました。

難しかった

- ・英語だと、コメントがワンパターンになっていた。
- ・英語で返そうと思ったけど、思ったように上手く伝えられなかった。
- ・発表するのではなく、聞いてすぐに文を作って言わないといけないので、とても難しかった。
- ・まだまだ勉強する必要があると思った。
- ・もっと詳しく言いたいのにも、説明が出来なかったり、すごく悔しいときがあります。もっと、英語でも会話したいと思いました。

英語での応答は、ビンゴカードで言い慣れた、

定型表現を中心に対応していた。生徒は英語ではじめてのやり取りに、難しいと思いながらも、「自分の英語が伝わってよかった」「英語の質問の意味がわかって嬉しかった」と思っ



図3-6 スピーチの感想を言う生徒

ていることがわかる。しかし、思ったように言えなくて、困っている姿もうかがえる。実際にはスピーチ後の応答は、時間がかかった。しかし、指導者は辛抱強く、静かに、生徒の発話を待った。

太田は、「生徒の主体的な行動を待つことは、生徒に対する教師の信頼や期待の表現である」(31)と述べている。指導者は、生徒が身につけてきたコミュニケーションに対する態度を尊重し、学んだ表現を使って、自分で発話して欲しいと考え、じっと待っていた。生徒たちは、応答を自分たちの力で進めなければと気づき、真剣に考え、知恵を絞り、会話を続けようと努力していた。そのため生徒は、やりきった後には、難しかったが、達成感を感じたのではないだろうか。

今後は、生徒が応答に使う定型表現については、自分の気持ちに合うような語彙や表現を増やすことで、英語での応答がより幅広くなるのではないかと考える。

次に、「スピーチ後のやりとりで、大切だと思ったこと、これはいいなと思ったこと、役立つと思ったこと」についてアンケートを通して生徒に聞いてみた。生徒の記述の一部を紹介する。

聴くこと

- ・発表しているときに、ちゃんと聴くことがよくできていたと思う。
- ・質問をする人も、友達の質問に答える人も、何を言っているのかを聞こうとする気持ちが出てくる。

コミュニケーション

- ・相手も自分も下手な英語かもしれないけれど、相手の言いたいことが伝わってくる。それがすごいなあと考えた。

嬉しかった・よかった

- ・僕がスピーチをしているとき、友達がしっかり聞いてくれたことがうれしかった。
- ・自分のスピーチにコメントを言ってもらったけど、やっぱり嬉しくなった。こういうのっていいなと思った。
- ・やっぱり、コメントがすごく嬉しい。

生徒は、コミュニケーションのためには、「聞くこと」がとても大切で、しっかり聞いてもらえると嬉しいと思っていることがわかる。また、聞くことが大切であるとわかったので、自分が話す

ときには、相手のことを考えて、話さなければならないと気づいた様子うかがえる。

確かに、スピーチに対する感想は、事前に言うことを用意できない。スピーチをしっかり聞いて理解し、その内容にあった質問や感想を言わなければならない。そのことが、とても難しいと感じたのだ。英語で伝えるために、時間がかかっても感想を言うことができ、またコメントを言ってもらったときには、大きな達成感を得ていたようである。また、スピーチを1年生の時から複数回取り組んでいるので、過去の自分と現在の自分を比べることができ、徐々にできることが多くなってきたと感じているようであった。一方、言いたいことが表現できないことに対しては、もっと勉強しなければという意欲の高まりにつながっているように感じた。

日本語でも、英語でも自分のスピーチに感想を言ってもらったり、自分の感想にコメントを言ってもらったりすると、とても嬉しいと思っているようだ。それは、スピーチを聞くことを通して、自分が肯定的に受け入れられたと感じることができたからではないだろうか。

次頁の表3-1は、教科書のユニットの目標と教科書に例として挙げられていたスピーチ、本研究で生徒に提示した目標と生徒に提示したスピーチの文数と語数、さらに実際の生徒のスピーチの結果をまとめたものである。

昨年度から「自己紹介」のスピーチに取り組んでおり、第1学年のUnit 2が終わった段階で、30文程度のスピーチは書けていた。そのため、第1回スピーチでは、生徒があまり戸惑うことなく、昨年度の自分のスピーチや、また第1学年で使っていたビンゴカードの英文、スピーチ例を参考にして、原稿を書き進める姿があった。

英語がやや苦手と感じていたB君も、自分の伝えたいことを明確にもち、原稿を作っていたのが印象的であった。また、語数でも第3回スピーチでは、教科書の例文の2倍の記述量で、目標を十分に達成できている。

3回のスピーチを通して見られた生徒の姿や、アンケートを通しての生徒の声から、生徒の変容を探ってみたい。

生徒は、第1回スピーチから英語で、最初の一文の感想をスムーズに言えていた。提示した形容詞から生徒なりに選んで使っていた。これは、ビンゴカードを活用して継続して取り組んだ成果が表れたと考える。

表3-1 スピーチにおける教科書の目標と本研究で生徒に提示した目標と実際の生徒のスピーチの文数と語数

	教科書の ユニットの目標	教科書の スピーチ例	生徒に提示した 目標	生徒に提示した スピーチ例	A君の スピーチ	B君の スピーチ	Cさんの スピーチ
第1回 スピーチ			25~30文	36文 194語 33文 183語	29文 140語	28文 145語	28文 151語
第2回 スピーチ	夏休みの予定について、50語程度	9文 55語	20文程度	18文 150語 22文 166語	15文 115語	15文 117語	17文 125語
第3回 スピーチ	夏休みについて、具体的な情報を入れる	14文 79語	20~30文	22文 143語	28文 186語	25文 160語	22文 156語

日本語でわかったことや思ったこと、生かしたいことについて述べたときには、初めは話型を意識しすぎていたが、自分の思うことを自由に言えるようになった。スピーチを聞き、初めて知る友達の一面もあり、和やかな雰囲気にも包まれた。

何よりも、スピーチの発表者が、クラスの友達からの感想を期待に満ちた表情で待っていて、その感想に笑顔で答えていたのが印象的であった。

「スピーチが自分にとって、どんなことに役立ったか」を、アンケートを通して聞いた。以下は、生徒の記述の一部である。

●自己を見つめる

- ・自分を見つめるチャンスになった。
- ・改めて、自分の生活の中で好きなことを見直せた。
- ・(私の)発音が上手いという感想は、びっくりした。そのことに注意して音読などしたい。
- ・家族にいろいろ聞いたりしたから、自分の家族のことがわかって、おもしろかった。

●構造的に表現する

- ・becauseなどを使って、そのことの原因とかを説明できるようにして、嬉しいと思う。
- ・話の展開が上手になったと思う。
- ・大人のスピーチに近づいてきたと思う。
- ・授業で習ってきた単語をどんなふうに使えばいいかわかった。
- ・具体的に内容を絞って詳しくスピーチできた。
- ・使える文が増えて、具体的に書けるようになったのが嬉しい。

生徒たちに、「クラスの友達のスピーチをどんなことに注意して聞いたのか」を、アンケートを通して聞いてみた。以下は生徒の記述の一部である。

●相手を受容する

- ・友達がどこを聞いて欲しいかを考えて聞いた。
- ・できるだけ、目を合わせるようにした。
- ・相手の気持ちをしっかり聞いた。また、好きなことや特技も興味を持って聞いた。

生徒のスピーチを聞く表情が、今までにも増して真剣であった。感想は友達のスピーチの内容に合ったことを言わなければならないので、聞き逃さないようにしている姿が見受けられた。相手を受容しながら聞くということまでは自分たちでは意識していないようだったが、結果的には今まで

よりも、より真剣に聞くことができた。

次に、「自分のスピーチに対して、クラスの友達から感想や質問を受けたことについて、どのように思っているか」を、アンケートを通して聞いた。次に生徒の記述の一部を紹介する。

●内面的に深まる

- ・スピーチをやることによって、自分のことがわかったりしたので、役に立ちました。
- ・人によって、聞きどころが違って、いろんな感想が聞けておもしろかった。
- ・心の中で聞きました。

●人とつながる

- ・自分のことを知ってもらって嬉しかった。
- ・去年とはちがうクラスの友達に、少しでも私のことがわかってもらえて、よかった。
- ・スピーチを聞いて、相手のことがわかりました。
- ・初めて話す人とスピーチを通じて打ち解けました。
- ・友達がしっかり聞いてくれたことが嬉しかった。

スピーチの後で、感想を聞くと、自分の言ったことが伝わったかがわかる。感想を聞くことは、生徒にとっては楽しみであり、伝わったことがわかったときは、嬉しく感じたようである。スピーチは授業の中で3回ぐらいに分けて行なったが、回が進むにつれて、スピーチでの話し方も変わってきたように感じた。クラスの友達のスピーチから学んだのである。

スピーチをする順番は、前述したように、希望者から順に発表をさせた。英語に苦手意識を持っている生徒は、後のほうで発表をしていたが、クラスの友達の発表を何人も見てから発表することになるので、余裕を持って発表できていた。

生徒の感想からは、前章で述べたスピーチを通して目指す5つの姿(図3-7)が見えつつある。

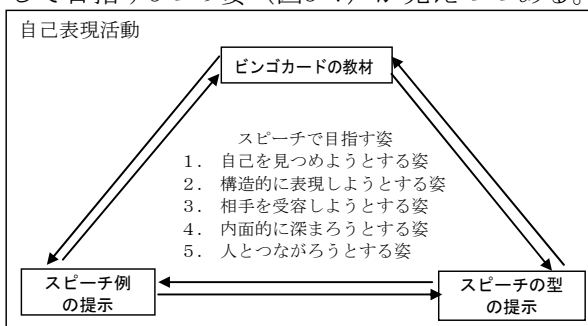


図3-7 スピーチで目指す5つの姿

第4章 小中一貫した英語教育をめざして

第1節 小学校英語活動と中学校英語学習を

つなぐもの

小学校英語活動の成果を中学校の英語学習に生かし、実践的コミュニケーション能力の基礎を育成するために、授業の中で大切にしたいことが2つある。

1つ目は、生徒の「つまずき」を考えることで、2つ目は、自己表現活動を積極的に取り入れることである。以下に詳しく述べる。

(1) 読むことや書くことでの

「つまずき」に対する支援を工夫する

小学校英語活動では、英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することをねらいとして活動が行われている。子どもたちは「聞く」「話す」の活動を中心に、英語の単語や文を聞いたり、話したりしながら、簡単なやり取りをしている。また、クラスやグループの中で英語を使ってのゲームにも取り組んでいる。そのため、英語活動を楽しんでいた子どもが多いと思われる。

一方、中学校の英語学習では、「聞く」「話す」に、「読む」「書く」の学習が加わり、さらに「正確さ」が求められることになる。生徒は、その求められるものの質や量の違いに、戸惑うことが予想される。この戸惑いを予想して授業を進めないと、生徒はつまずき、意欲を低下させてしまうことも考えられるのである。

「読む」「書く」を習得するためには、継続した努力が必要である。その努力を惜しみなくできるような取組が大切なのである。

例えば、中学校での文字の導入時について考えると、小学校では扱っていなかった「読む」「書く」については、生徒にとっては魅力的であり、早く読んだり、書いたりしたいと感じている生徒も多いと思われる。英語活動で、ある程度の英語を聞いたり、伝えたいことを英語で言えるようになったと感じている生徒たちは、今度は英語を読めるようになりたい、書けるようになりたいと望んでいるであろう。もしかすると、これらのことを簡単に出来るようになると考えている生徒もいるのかもしれない。しかし、実際に学習してみると、日本語とは違い、アルファベットを覚えたからといって、すぐに単語が読めるようになるわけではない、書けるようになるわけでもないというこ

英語の基本表現をゲーム形式で定着させ、小学校での話型を活用した経験を生かし、それを英語での自己表現活動の中で活用した。生徒は、話型を手がかりとしながらも、自分の伝えたいことを構造的に伝えるために改良したマッピングを使って原稿を書くことができた。スピーチ後の応答では、お互いを受け入れながら聴き合い、ゲームで定着した定型表現を使って英語での応答ができた。その結果、前述の5つの姿が見られた。この5つの姿の土台には、「聴く」ことを通して、お互いに受容できるクラス作りがあったと考える。

次に、指導者にも3回のスピーチを終えての感想や意見を聞いてみた。

スピーチに取り組んだ中で

生徒の興味・関心は高まったか

- ・「やりがいがあった」「達成感を得られた」という感想が生徒から聞かれた。

生徒の基礎・基本の定着に有効であったか

- ・数回のスピーチで、ほぼ同じあらすじで表現する生徒もいたが、前回のスピーチに改良を加えたり、新しい表現を使おうとする生徒も見られた。
- ・使いこなせる語彙や文が増えているように感じた。
- ・学習に遅れがちな生徒も、パターンの的に書けるようになってきた。
- ・基本文の定着に有効であった。

スピーチに複数回取り組むことにより、学習に遅れがちな生徒も、原稿が徐々に書けるようになり、また、生徒の中には、新しく習った表現を積極的に取り入れようとする姿もあった。

さらに、自己表現活動に生徒同士の双方向からのコミュニケーションを意識して取り組んだことに対しての指導者の意見を聞いてみた。

英語をコミュニケーションの道具として考えるだけでなく、英語を通してクラスの友達を共感的に受け入れて、人間関係を結ぶこと、人と人が出会って、豊かな人間関係が作れるための英語というとらえかたをして、自己表現活動に取り組んできましたが、そのことについての先生のご意見をお聞かせください。

- ・自ら聞き取ろう、感想を伝えようとする動きが現れてきた。
- ・言葉を使って人と人がつながる喜びを感じるための方法を教えることが重要だと思っています。
- ・あまり話したことがないクラスの友達のことがスピーチを通して理解できたと思う。

以上のことから筆者は、スピーチと双方向のコミュニケーションを通して目指す姿は、学校教育の中でこそ育てたい力でもありと考えている。

(30) 前掲(8) p. 23

(31) 太田光春「実践的コミュニケーション能力の育成を目指した英語教育の展開」『中等教育資料No. 855』文部科学省教育課程課 2007年8月 p. 70

とがわかってくる。繰り返し文字と音とを結びつけて発音する中で、その単語や英文が読めるようになり、何度も書く練習をして、その単語や英文が書けるようになるのである。このような継続した努力を意欲をもって続けてこそ、読めたり、書けたりできるようになるのである。生徒が、意欲をもってその努力ができるようになるまで、時間をかけ、工夫して指導する必要があると考えている。小学校英語活動で音声での指導はできていると思って、すぐに覚えて書けることを生徒に求めると、生徒は戸惑い、つまずき、意欲を低下させてしまうのではないかと危惧する。

今回の研究を終えた中で、指導計画や学習指導案を作成する時に大切だと思ふことと、生徒の「読むこと」や「書くこと」でのつまずきに対する支援として、以下のような指導の工夫をしたいと考えた。

【予想されるつまずきに対する指導・支援を指導計画や学習指導案にあらかじめ記す】

指導計画から各時間の学習指導案を作成する段階で、生徒のつまずきを事前に予想し、それに対する支援を指導計画や学習指導案にあらかじめ書いておくことが大切である。指導者が書くことで、生徒のつまずきやそれに対する支援ははっきりと自分の中で認識できるからである。これらの準備しておくことは、実際の授業の中で遭遇する生徒のつまずきに、すばやく対処できることにつながり、また、実際に予想していなかったつまずきに遭遇したとしても、事前にそのようなことを考え準備しておいたことが、指導者の奥行きや幅のある対応につながると考えている。

このような、生徒の「つまずき」の中で、特に「読むこと」「書くこと」に対する支援の具体的な工夫として、以下に3つ述べる。

【ゲームを活用した音読の工夫する】

第1章でも述べたが、英語を読めるようになるには、生徒が文字を見て発音する機会を多くもつことが大切である。それも生徒が飽きることなくできるような工夫が必要である。小学校英語活動では、生徒はゲームを活用した活動を楽しんでいる。生徒同士でルールを守りながら活動することに楽しさを感じてきたのである。それを生かして、中学校でもゲームを活用し、継続することができる音読の工夫をしたい。小学校と接続する1年生だけではなく、2年生、3年生において

もゲームを活用した音読の工夫は効果的であると感じている。

生徒が英語を読んで、大体の意味を理解することができれば、英語に苦手意識を持った生徒も、英語を身近に感じることができ、また、授業で取り組むグループワークやペアワークなど、英語を使った活動にも、自信を持って参加できるのではないだろうか。そして、自信を持って参加できることが、それらの生徒たちの英語学習への意欲を高めることにもつながると考えている。

音読を継続して取り組むこと、すなわち、読むことを鍛えることは、英語学習においてはとても大切であり、意欲的に英語を学ぶためには、英語が読めることが大切である。それは、英語が読めないと、英語が書けるようになるのは難しいと考えるからである。

【参考となる文例を豊富に生徒に提示する】

小学校英語活動を経験してきた生徒は、先にも述べたが、書くことに対して大きな期待をしている。しかし、いざ書いてみると、ローマ字のように規則的に並ばない文字に、「書けるようになるには、これを全部覚えなければならない」「継続した努力が必要である」と気づくことであろう。英語を「聞く」「話す」を中心に楽しんできた生徒たちだからこそ、小学校英語活動を経験していなかった生徒たちよりも、「書くためには継続した努力が必要である」と感じたときの戸惑いは大きいであろう。そのために、「書くこと」で生徒がつまずくことが予想される。そこで、授業の中で、生徒が書くことに対して意欲を低下させないような取組の工夫をしたい。生徒が英文を書こうとする際に、参考となる文例をたくさん生徒に提示することで、英文を書くときに、生徒が取り組みやすくなるのである。

第3章で述べた、英語に苦手意識をもっているB君が、どのようにして記述量を十分に満たした原稿を書けたのかを聞いてみた。すると、「スピーチ例を参考にして、わからない単語は辞書で調べました」との返答であった。

このように、生徒は参考となる英語の文例が多く用意されていると、それらを参考にして自分の伝えたいことや言いたいことを書き進めることができる。もし、参考となる英語の文例のいくつかをそのまま使ったとしても、それが、生徒の伝えたいことや言いたいことと合っているのであればかまわない。その使った英文を覚えて相手に伝え

るときに、それらは自分の表現となり、その個人の中で定着が望めると考えるからである。参考となる文例から、英文を選び、構成していくことも学習方法の一つであると考えている。また、生徒が書いたものを指導者が見ると、それぞれの生徒がどこまで理解していて、どこでつまづいているのかがわかるので、その生徒に対して個別に支援や指導をすることも大切にしたい。

【話型を生徒に提示する】

英語で書くときや話すときには、小学校の教科や教育活動で用いられてきた「話型」は有効であると考えている。小学校では、この「話型」を活用することにより、筋道を立てた話し方や書き方を学び、話し始めたり書き始めたりする手がかりとする取組が実践されている。その話型の取組みを中学校の英語科においても活用したい。まとまった英文を書くときには、書き出しや、途中の話題の出し方、話の続け方、終わり方などを話型として示したい。そのことにより、生徒はそれらを手がかりとして、文例を参考にして書き進めることができると考えている。

(2) 自己表現活動を積極的に取り入れる

ここでは、授業の中で取り組む自己表現活動について、大切にしたいことを2つ述べる。

【自己表現活動を積極的に取り入れる】

授業の中で、自己表現活動を積極的に取り入れたいと考える。

小学校英語活動で育っている意欲や積極的な態度は、自己表現活動においてさらに伸ばすことができると考える。生徒は、「英語で話したい」「英語で書きたい」と願っている。その願いに応えることができ、達成感をもたせることができれば、英語学習に対して意欲をもちつづけることができると考えるのである。

本研究では、3回のスピーチに取り組んでいるが、それだけではなく、研究協力校の指導者は常に自己表現活動に取り組んできた。新しい表現や、語句を指導したときには、一言でも生徒に英語で自己表現をすることを求めてきた。それゆえ、生徒は、英語の時間に自分のことや自分の気持ちを英語で話すことは当たり前のように思っていただろうし、クラスの生徒達も伸び伸びと自己表現活動ができる雰囲気を感じていたとも考えられる。このような、指導者の自己表現活動に対する

姿勢が生徒のスピーチにつながっていたのではないだろうか。毎時間の指導計画にも提示しているが、授業の中で常に英語で自分を表現させることは、まとまった内容で自己表現をさせるときの前段階として取り組みたいことである。

【生徒の興味・関心がある内容で、生徒の心理的な発達段階に合った自己表現活動の工夫をする】

自己表現の内容は、生徒の興味・関心があるもので、生徒の発達段階に合ったものでありたい。

生徒の日本語での言語力と英語での言語力には、大きな差があることから、日本語では深く語れることも、英語では文型や語彙の少なさから思うように表現できないのは当然のことである。しかし、自己表現は、言いたいことの羅列ではなく、接続詞を工夫して、中学2年生が話す内容を、英語でも表現して欲しい。

話題は、生徒の興味・関心があるものを選び、生徒が書いてみたいと思えるものを用意したい。そのためには、前述した話型を取り入れたり、生徒に表現して欲しいと思う文例を豊富に提示したりすることは大切なことである。生徒が、文例を読み、それに共感できたとき、「自分ならこんなことを書いてみたいし、言ってみよう」と学習意欲を高めることができるのではないだろうか。

【応答的な自己表現活動の工夫をする】

応答的な自己表現活動を工夫したいとも考える。自分の表現したいことを、言ったり、書いたりするだけではなく、それを聞いて、クラスの人が応える場面を工夫したい。

小学校の国語科をはじめ多くの教育活動では、人間関係を築くことを視野に入れた伝え合いの活動で、子ども同士が「一往復半」のやり取りをすることを大切にしている。そのことを生かし、本研究では、スピーチを発表し、それに対しての感想を聞き、またコメントを言うという、「一往復半」の英語でのやり取りに挑戦した。相手を肯定的に受け入れながら、自分の思いを伝えるやり取りを、中学校の英語科でも大切にしたいと考える。このようなコミュニケーションを通して、相手から学び、自分も相手に影響を与えるなかで、人間関係が深まり、お互いが高まることを期待するからである。このことが、実践的コミュニケーション能力の基礎の育成につながると考えている。応答的な自己表現活動で、英語を通して人とつながることを英語の授業で大切にしたいと思う。

第2節 中学校英語教育で大切にしたいこと

(1) 人と人々が英語を通してつながること

スピーチの活動では、生徒は自分の英語のスピーチに対して、どう思ったのか言って欲しいと思っていることが強く感じられた。

また、スピーチの後の応答では、生徒が自分の話す英語をクラスの友達が耳を傾けて聴き、その友達から感想や質問を受けたときに、とても嬉しいと感じている様子であった。友達が自分の話を聴く姿から自分が受容されていると感じたのであろう。友達からの言葉によって自分の新たな面に気づいたり、自分を見つめ直すきっかけとなった生徒もいた。

スピーチ後のアンケートでは、友達が自分のスピーチに耳を傾けて聴き、理解してくれたことや、感想やわかったことを言ってくれたことが嬉しいとの感想が多く見られた。このように、生徒は自分の自己表現を通してやり取りをすることを楽しんでいる様子であった。

また、スピーチ後に英語での応答に挑戦した第2回スピーチでは、友達のスピーチを英語で聴いて、英語でわかったことや感想が言えたり、友達の感想や質問に対して、英語でコメントが言えたりしたときには、大きな達成感を感じた様子であった。英語でのやり取りは、ビンゴカードの教材で練習していた定型表現を使ったものであったが、生徒にとっては、「英語で聞いて話せた」と充実感や達成感をもった様子であった。

スピーチ後に前章のB君に質問してみた。「スピーチはどうだった？」という筆者の問いかけに対する第一声は「英語で会話ができるのがよかった！」と誇らしげに答えていた。B君なりに、一生懸命に聴き、感想を言ったり、コメントを言ったりしたということがその言葉から感じられ、筆者自身も嬉しく感じた。

中学時代には、特定の気の合う人と深く付き合いたいと思う時期だと言われているが、それだけではなく、幅広く人間関係を結べるようになって欲しいと願っている。学校では、教育活動全体を通して、クラスの友達と交流し、つながることに取り組んでいるが、英語の授業では、英語を通してクラスの友達と人間関係を幅広く結んで欲しい。日本語では、この時期には照れてしまったり、普段言わないような感謝や賞賛や励ましなども、英語でなら容易に言えることもあるだろう。このようなやり取りを通して、クラスで学び合い、互

いに高め合う集団になることを期待し、今後の筆者自身の実践でも大切にしたいと考えている。

(2) 人と人々が出会うコミュニケーション

実践的コミュニケーションとは何であろうか。例えば、道を聞かれて、教えることができたり、買いたいものが店で買えたりすることもその一つであろう。しかし、そのような会話に留まるのではなく、もっと深いコミュニケーションをも意味するのではないかと筆者は考えている。上記の場面では、コミュニケーションの相手が見知らぬ人であり、誰にでも置き換えることができる人である。しかし、そのような相手との会話だけではなく、生徒がその相手と会話をすることで、お互いの人間関係が深まるような心と心をつなぐコミュニケーションをも含んでいると考えている。

サン・デグジュペリの「星の王子さま」の中で、キツネが、王子さまに次のことを言っている。

「あんたの目から見ると、おれは、十万ものキツネとおんなじなんだ。だけど、あんたが、おれを飼いならすと、おれたちは、もう、おたがい、はなれちゃいられなくなるよ。あんたは、おれにとって、この世でたったひとりのひとになるし、おれは、あんたにとって、かけがえのないものになるんだよ…」 (32)

王子さまが「飼いならすと」、つまり、言葉をお互いに交わして信頼関係を築き、仲良くなると、そのキツネは、王子さまにとっては、かけがえのないキツネとなる。そしてそのキツネは、ほかの十万匹のキツネでは代用できない、この世でたった一匹のキツネになるということではないだろうか。

このように、コミュニケーションを通して人と人が温かい人間関係を築くことによって、その相手が、他の誰でもない、自分にとってかけがえのない人になるのである。

英語でのコミュニケーションを通して、生徒がクラスの友達とかけがえのない存在として出会い、お互いを受け入れ、影響しあう中で、心と心が触れ合い、心と心をつなぐことができるような指導が、小中を通して大切であると思っている。

(3) 言語能力を高めること

中学校英語教育の中で、生徒の言語能力を高めることを意識することも大切であると考えている。

英語は言葉である。言葉の役割の一つは人と人を結びつけることである。身近な人と関わる時

には、声の調子、顔の表情や身振り手振りなど非言語的手段にたよりながらコミュニケーションを行うことができる。文法事項にこだわらず、時には単語だけでも伝わることもある。そのような、人としての温かさや、ぬくもりが伝わってくるコミュニケーションも大切にしたい。

一方、中学生の発達段階を考えたときに、生徒が、自らの思いを、英語で筋道を立てて表現することも大切にしたい。そのためには、非言語的手段にたよらず、構文的に整った文を使い、構造的に伝えることが必要であり、文法や綴りもしっかりと生徒に定着させる必要があると思っている。この前述した温かさや、ぬくもりが伝わってくるコミュニケーションと筋道を立てた表現で構文的に整ったコミュニケーションとの両者がバランスよく定着したときに、実践的コミュニケーション能力の基礎を培ったことになると考えている。

また、言葉の役割の一つとして、人間の思考を支えることも挙げられる。その思考を支える言葉が、非言語的手段にたよらない筋道を立てて表現する言葉なのである。生徒の思考を支える言葉として、生徒には、構文的に整った文を使い、構造的に伝えることを学んで欲しい。筋道を立てた文章になるように、構成を考えることも、生徒の英語での言語能力を高めることになると考えている。

そして、英語で構造的な内容を話したり、書いたりすることができるということは、もちろん母語である日本語の言語能力に深く関わると思われる。このような、非言語的な手段にたよらない筋道を立てた表現で話せる言葉を学ぶことが、母語における言語能力育成の促進に役立つのではないかと願っている。

英語の授業の中で、英語や日本語の言語能力を育成することを意識して取り組むことは、生徒の豊かな人間性をはぐくみ、生徒のこれからの人生をも豊かにすることにつながるのではないかと期待している。

(32) サン・デグジュペリ『星の王子さま』岩波書店 1953. 3 p. 107

おわりに

2年間の研究で考えたことが、2つある。

1つ目は、「**実践的コミュニケーション**」についてである。生徒は、中学校の英語を学ぶことで、

何を身につけて社会に出ていくのだろうか。英語を使って、単に意思の疎通ができることに留まっていたのでは不十分であると感じた。人と人とが出会えるようなコミュニケーションをめざすことが大切であると考えている。そのためには、個別学習で完結することなく、お互いに高まりあうクラスの中で学び合うことが、重要な意味をもつと考えている。

英語で人と人とが出会えるようなコミュニケーションを大切にすることで、クラスの友達との人間関係を結び、やがてはその関係が広がり、世界の人々とかけがえのないひとりとして出会えることを願っている。英語や様々な言語を学ぶ上で大切にしなければならないことは、それらの言語を理解するだけではなく、それらを話す人々と温かい人間関係を結ぶことができるということである。そのような積み上げが、世界の平和を築くための礎になると考えている。

2つ目は、生徒の「**つまずき**」についてである。指導者には、生徒がどの場面で理解できずに戸惑うのか、どの場面で前に進めなくなってしまう困ってしまうのか、また、意欲を低下させてしまうのかなどを予測する力が必要である。

一般的に、指導者は、今まで英語を学んできた中で、比較的つまずかずにきたのではないかと考える。指導者自身が、英語が得意教科であった、または、英語が好きな教科であったことが、生徒のつまずきを予測するときに、マイナスに働く可能性もある。その結果、英語の不得意な生徒の気持ちや、生徒のつまずきを理解できないことがあるのではないだろうか。そのことを十分自覚した上で、生徒の「つまずき」やつまずいている生徒の気持ちを共感的に受け止めるように努力することが大切であると再確認した。今後、そのことを常に自覚して生徒たちに指導していきたいと思っている。

指導者は、教える立場である。同時に、指導者も生徒に学ぶ姿勢が必要であると感じている。今後の自分の実践で、生徒のつまずきを受けとめ、自分の授業について考える機会をもちたいと思う。

最後に、2年間にわたった研究に、惜しみない協力をしてくださった、京都市立嵯峨中学校の研究協力員の先生や英語科の先生方、教職員の皆さん、そして、一緒に楽しく意欲的に学んでくれた生徒たちに、この場を借りて心よりの感謝の意を表したい。